
最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

勝利 g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

【Nコード】

N9452Y

【作者名】

勝利g

【あらすじ】

魔法使いが魔獣使いに滅ぼされてから三百年。名家に生まれたのに魔獣に嫌われる主人公。だが、落ちこぼれと言われていた魔獣使いである主人公が最強の雷獣と契約！？ 学院一の優等生の秘密も知っちゃって？ いろんな障害を乗り越えて、無事卒業できるのか！？ バトル半分、ファンタジー半分です><

一話（前書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします。

一話

魔法世界、レグアニア。

魔獣使いを育てるエンティクスト学院――。

荘厳な、というより古臭いといったほうがあっている装飾が施された教室の中、春のぽかぽかとした日差しに当てられて、俺、ロスト・クレイグはまどろみの中にいた。
が、横から声かけられる。

「ロストくん！ 起きなつて！ 授業終わったよ？」

良く通るアルトボイスだ。

こんな声を出す知り合いは一人しかいない。俺はしぶしぶながらも意識を覚醒させ、首を声の主のほうに向ける。

ふわぁ…と大あくびをしてから、俺は口を開いた。

「なんか用か？ ルイス」

ちよつと垂れ目で人の良い同級生、ルイスは困ったように笑った。

見た目はまるで美少女のようだが、白と青の制服に包まれた体は起伏に乏しく、そして何よりついでている。

「なんか用かって言われても、次は実技だから草原まで行かないと」
「あー…、ついにこの時がやってきてしまったか…」

俺はルイスの説明に深刻そうな表情を作って答える。

ほかの生徒にとってはたいしたことのない授業なのだろうが、俺に

とっては大問題だ。

だが、その理由を説明する前に。

ここ、俺の通っているエンティクスト学院は三百年の歴史を誇る魔獣使いの学院だ。

魔獣使いについての説明をするには少し長くなってしまいが、歴史の授業の反芻だ。

レグアニアを三百年前まで支配していたのは、少数の魔法使い達だった。

強大な力を持ったそいつらは、魔法を使えない者たちを無力民と呼ばび、差別して圧政を行っていた。

しかし、一人の無力民の学者が、魔獣のすむ世界『エニグマ』への道『ゲート』を開いたことで世界は一変する。

無力民は魔獣と契約し、魔法使いに匹敵する力を手に入れ、自分たちのことを魔獣使いと呼んだ。これが魔獣使いの発祥である。

魔法使いと魔獣使い。力が同じなら勝つのは当然、数の多い魔獣使い。

『聖戦』と呼ばれたこの戦いで、魔法使いのほとんどは死に絶えることとなったが、魔法使いの王が最後の悪あがきに、己の命をすべて魔力に変換。

魔法生物『ルキア』を世界中に放ってしまった。

魔獣使いはルキアに対抗するために、ゲートの開いている場所に聖都ルミティアを建国。

魔獣使いを育てる学校『エンティクスト学院』を創った。

だが、俺はそのエンティクスト学院において、今現在《落ちこぼれ》のレッテルを貼られている。

それは俺の抱えている大問題の結果ともいうべきものなのだ。

「と、とにかく行こうよ。このままじゃ遅刻するよ?」

「そうだな」

多少焦りの色を顔に浮かべたルイスの提案に俺は言葉と共に首肯した。

俺はルイスと連れ立って三年グリフォンクラスの教室を出る。それから大きな校舎の西側に建設されている魔獣の飼育施設『草原』へと向かった。

クラスは、『ガーゴイル』『グリフォン』『グレムリン』の三つ。魔獣と契約するために一年間も一緒に勉強して来たのだが、クラスメイトどもは俺とルイスを置いて先に行ってしまったらしい。薄情なやつらだ。

ルイス…、ルイス・エルンダートは入学式の時に俺の横に座っていたやつで、意外と話が合うためつるんでいる事が多い。ちなみに俺とルイスが十六歳で同じ年だと知ったときは驚いた。

早歩きで校舎の中を歩いていると、ルイスが話しかけてきた。

「そういえばさ、ロスト君」

「あんだよ？」

「ずっと前から気になってたんだけど…。その髪と目の色、おじいさん譲りって本当？」

俺の目つきの悪い眼球の色とそれを隠す髪。漆黒の髪に翡翠色の目は、確かにルイスの言うとおり祖父の遺伝である。

だが、それは俺にとってはコンプレックスにしかないので封殺する。

「んな話より、足動かさねーと本気で遅刻すんぜ？ ああ暴力教師に体罰食らうことになるぞー」

「えー！？ 今日の実技担当ってジルマス先生だったっけ？」

ジルマスとは、二つ名が体罰の鬼という毛深い筋肉の塊のような教師だ。

それに本人の魔獣もゴリラのようなのだから笑えてくる。首を縦にこくこくと何度も振って肯定の意思表示をすると、ルイスの顔が青ざめた。

「僕あの先生苦手なんだよ！」

早歩きから小走り、小走りから全力疾走へ。ルイスは一瞬で移行すると俺を置いて走り去ってしまった。

俺はその背中を見ながら一言。

「嘘だよ」

短くつぶやく。

今日の実技担当は生徒に甘いフローウエルだったはずだ。

俺は自分のペースを守りながら、悠々と草原へと向かった。

二話

「ひどいよロスト君！ 今日にはフローウェル先生じゃないか！」

草原へ授業開始の直前に到達した俺に開口一番、ルイスはそう言った。

俺は首をかしげながらルイスに言い返す。

「ちゃんと授業担任を確認してないお前が悪い」

「……………それはそうだけど」

ルイスは金髪で女のような顔、垂れ目、というような見た目どおり、気が弱い。

さつきも恐らく、自分が間違っているかも知れないという不安に駆られたんだろう。

確認してたのにクレイグ君が言い張るから！ と反論されたところで「人に流されるお前が悪い」とでも言えば済む話だ。

悔しそうにしているルイスは放っておいて、俺はクラスメイトの集まっている場所まで歩いていく。

ルイスも後ろからついてきて、俺の横に並んだ。

級友たちが集まっている円の中では、フローウェルが一匹の魔獣を檻から出しているところだった。教師による実演だ。

この学院の実技とは、実際に魔獣と触れ合うこと。

エニグマで自分のパートナーとなる魔獣を見つける前に本物——といっても人の魔獣から生まれたレグアニア育ちの魔獣だが——と触れ合わせることで、魔獣に対する扱い方などを学ばせようというの

だろう。

そして同時に、俺の抱える大問題とは実技の授業で必ず起こる――。

フローウエルの実演が始まる。

魔獣に己の生気を与え、その魔獣の武器『アーマメント魔獣外装』を召喚する技術。

「まずは魔獣に生気を流すのです」

そういつてフローウエルは、赤い毛並みを持った犬のような魔獣『レッドハウンド』の子犬の額に手を当てる。

子犬は気持ちが悪そうにぶんぶんと勢い良く尻尾を振っていた。

「そして次は魔獣に向かって契約の言葉を唱えるのです。『アーマメント魔獣外装』」

フローウエルの言葉を聞いた子犬の体から、光が滲み出して宙に浮かぶ。その光の塊は少しの間ふわふわと漂っていたが、やがて手を包み込むように覆った。光はどんどん収束していき、フローウエルの指には紅い指輪がはまっていた。

おお……！ と感嘆の言葉が生徒たちの口から漏れる。

フローウエルは、指輪を嵌めた手を空にかざした。

「これは魔獣が私から受け取った生気を魔獣外装に変換しているのです！　そして、こーんな小さな魔獣の魔獣外装でもこのようなことが出来るのです！」

先生の言葉が終わるか終わらないかのうちに指輪が強く発光、空中に向かって小さな火の玉が放たれる。

それは宙を少し飛んだかと思うと、ポンッ！ と可愛いらしい音を立てて、空中で破裂した。

フローウエルは立て続けにもう一発、火の玉を空に打ち上げる。

先ほどと同じように空中で破裂した花火を見上げながら、フローウエルは右手を高く掲げた。

生徒の視線がフローウエルの右手に集まる。

ピキピキピキッ！ パキヤーン！ と、指輪に亀裂が走り粉々に碎けた。破片は光の霧となって霧散する。

魔獣に与えた生気の分の魔力を消費し終えた、ということなのだろう。

ルイスは俺の隣でなにやら興奮している。大丈夫かコイツ…と内心で心配しているとルイスは急に俺のほうを振り向いた。

「どうした？ ルイス」

「魔獣外装かあ…、僕たちにも出来るかなあ…」

「お前はがんばりや何とかなるだろーよ。つーかこの授業三回目だし」

「そうだよねえ…、がんばらないと…」

一部分を強調した返しをしてやっているのに、ルイスは目をキラキラさせてフローウエルと子犬を見ている。

俺があきれた視線をルイスにぶつけていると、フローウエルが自分の植物のような魔獣『エスカドス』に命じて、いくつもの檻を持つてこさせていた。

「はい、皆さんには私と同じことをしてもらいます。二人一組になつてください」

そう言われて、俺は右にいるルイスを見る。ルイスも同じことを考えていたようで俺と目が合った。

お互いに頷きあつて二人一組は完成。他のやつらも各々ペアになっている。

ガシャリ！ と金属的な音を立ててレッドハウンドの子犬が入った檻が俺たちの目の前にも置かれた。

「それでは檻を開きますので、一人ずつ生気を与えてください」

その言葉を聞いて、俺はルイスに「先にやれ」と親指を立てて合図。ルイスは苦笑しながら檻に近づくと中から子犬を引っ張り出した。

「まずは生気の譲渡…だよね？」

ルイスは子犬の背に手を当てると、目を閉じて生気を渡し始める。触っている本人はすごく満足げだが、触られている子犬は不満なようだ。尻尾もまったく動いていない。

草原、という開放的な名前を持っているくせに、実態は檻に入れた獣の収容施設と同じで、ルイスも子犬が好きなくせに好きすぎて子犬に引かれるのだ。

このルイスの悩みは俺の抱える問題と似ているが、俺からしてみればうらやましい限りである。

そんなことを考えているうちに、必要量の生気を供給し終わったのだろう。

ルイスは一度俺と目を合わせてきた。見ていて欲しい、ということなのだろうか。

「じゃあ、始めるから…」

「がんばれー」

短く激励してやると、ルイスは頷いて目を閉じた。

集中して子犬と意識のやり取りをしているのだろう。第二世代の魔

獣だからこそ契約しなくても魔獣外装が使えるのだが、フローウエルのように簡単に魔獣外装を呼び出せるようになるには相当の修練が必要だ。

十秒間ほど目を閉じてから、ルイスはまぶたを持ち上げる。

二、三回深呼吸をしてから、一度大きく息を吸い込んで言葉を発した。

「アーマメント
『魔獣外装』！」

魔獣外装を呼び出した。

子犬の体から光が溢れ出したあと、ルイスの右手に集まって指輪の形となる。

魔獣外装の召喚は成功したようだ。ルイスは興奮した面持ちで俺の方を向いた。

「成功だな」

「うん！　じゃあ次は火を撃ってみるね」

他のペアでも成功した組が何組かいるようだ。空中に向けてばんぽんと火の玉が放たれている。

ルイスはさつき実演したフローウエルのまねをして、手を上に掲げ、意識を集中させた。

上に上げた右腕の手首を、左手で支える。するとポンッ！　と可愛らしい音がして、火の玉がルイスの手から射出された。

しかし次の瞬間、ボン！　と火の玉は一メートルほど進んだところで破裂。大きく広がった。

「んな！？」

「うわっ！」

火が俺とルイスの頭上を焼く。

なにしてんだ！ とルイスに文句を言いかけたのだが、悲劇はそれだけでは終わらなかった。

火の玉が爆ぜた次の瞬間、ルイスの指にはまっていた指輪が閃光を放って爆砕した。

その光はフローウエルの時とは違い、徐々に消えるのではなく一瞬だけで全ての光を放出。強烈な光が俺の視界を埋め尽くす。

これは『^{ファンブル}失敗』という魔獣外装に込められた生気が光に還ってしまいう現象だ。

「ご、ごめん…、失敗しちゃった…」

「失敗しちゃったじゃねーよ！ あぶねえだろうが馬鹿ルイス！！」

ぺこぺこと謝ってくるルイスの頭をはたきながら、俺は怒鳴りつけた。

失敗の規模によつては魔獣使いも危ないのだが、ルイスの指は無事だったようだ。

ルイスは恥ずかしそうに頭をかいて子犬を持ち上げると、ずいと俺に突き出してきた。

「じゃあ次はロスト君の番だね？」

「うっ…、いや、やっぱ俺はやめとく…」

「授業だよ？ やめておくとか無理なんじゃない？」

ぐ…、と俺は声を詰まらせる。

ルイスは子犬を俺の一メートルほど前に置いた。

ちょこん、とお座りをしている子犬に俺は、じりじりと近づいていく。

だが、俺があと二歩程度でたどり着く、という距離で子犬はビクッ！ と俺のことは見た。俺も動きを止めて、子犬と見つめあう。

その一秒後、プルプルと震えていた子犬が脱兎の勢いで俺と正反対の方向に駆け出していった。…犬のくせに脱兎の勢いとはどういうことだ。

「おい！ みんな見るよ！ またロストが逃げられてるぜ！」

クラスのお調子者、ジャックが俺の醜態を指差して笑いやがる。他のクラスメイトどももそれに便乗して笑い声を上げていた。

このグリフォンクラスで俺のことを落ちこぼれと笑わないのはルイスだけである。

エンテイクスト学院は二年生の学校だ。最初の一年で魔獣使いの基礎を学び、契約の儀で自らの魔獣を手に入れた後、一年の研修を経て正式な魔獣使いとして認知されるのだ。

閑話休題。

先ほどレッドハウンドの子犬に逃げられたように、魔獣に徹底的に避けられる。

これが俺の抱えている問題であり、落ちこぼれと言われる原因だ。魔獣使いは魔獣と心を通わせて戦う職業である。

それを育てるエンテイクストにおいて魔獣に嫌われる俺は落ちこぼれなのだ。

実家のクレイグ家がルミティア建国の際に力を持った名家なので、その後押しがなければ入学さえ出来なかっただろう。

ため息をつきながら悔しげに他のクラスメイトを見回すと、フローウェルが近づいてきた。

エスカドスが逃げ出した子犬を捕まえている。

「クレイグ君…、相変わらず魔獣には好かれないんですね」

呆れたように苦笑いしながらフローウェルが話しかけてきた。
俺は、更に深いため息をついてフローウェルに同意する。

「一年間ずっと嫌われ続けてます…」

実際は生まれたときからなのだが。母親の魔獣すら俺には近づかなかったという逸話がある。生まれてきてから十六年間、魔獣と仲良く触れ合った経験は一度しかない。

俺の目と髪の遺伝の元である祖父の魔獣、ブラックドラゴンだけだ。さつきはルイスの質問を受け流したが、伝説の魔獣使いとまで言われた祖父と同じ容姿というのは落ちこぼれにとって相当なコンプレックスになるのだ。

かたや伝説、かたや落ちこぼれ、同じ見た目でもこうまで違うものなのか。

まあ、落ちこぼれとは呼ばれていても、いじめられているわけではないのが救いではあるが。

フローウェルはそんな俺をみて、にこやかに笑った。
薄桃色の髪をなびかせて、一言。

「評価は『D』^{最低}です」

いつもどおりの死刑宣告をしてやがってくれました。

三話

「そんじゃあロストの前期実技五十回連続の評価Dと全研修の終了を祝して、乾杯！」

「『かんぱーい！』」

「デメエらいつか見返してやるからな…」

食堂で、グリフォンクラスの生徒が打ち上げをしている。集まっているのは四十人ほど、ジャックの俺へのからかいを混ぜた乾杯に合わせて笑っている奴らに、俺は復讐を誓いながら呟いた。ルイスも隣で笑っている。

「つーかおかしいだろーがお前ら！　なんで俺の評価Dが主体になつてんだよ！」

「それはお前がエンティクスト史上初全五十回の実技をDで通ったからだろ？」

ジャックが楽しそうに笑って、テーブルの上におかれた鶏肉を切り分けて俺の皿によそってきた。俺はそれを貪りながらルイスに話しかける。

「契約の儀っていつだ？」

「あと四日…だったと思うけど。ペアどうなるか楽しみだね？」

契約の儀が終われば、あとは実習だ。エンティクストにおかれている魔獣使いギルドからクエストを受けて、魔法生物であるルキアを討伐するのだが、その際の保険として二人一組でペアを作るのだ。要するに一人じゃ死ぬから二人でやれ、という学院側の要求だ。

そこで必要量の単位をとればエンティクスト学院から卒業することになる。

ルイスの言うペアとは、実技の授業で行う二人一組とは違って教師が決めるペアのことだ。

一年間で必要量の単位が取得できないと退学扱いになってしまうので皆ペア分けには必死になるのだが、ルイスはその重要さがわからないようだ。

「んなに能天気なくせに単位取れなかったら笑ってやるよ」

「笑わなくてもいいと思うんだけど…」

「嘆き悲しめと？」

「応援してくれればいいじゃん！」

「はいはい、単位取れなかったらな」

そんな感じで一時間ほどを過ごした後、テーブルの上にある料理を一通り皿に盛り付けると、俺は席を立った。

「クレイグ君、どうしたの？」

ジャックと楽しそうに談笑していた垂れ目で優しそうな女子——名前はレイアだったはず——が話しかけてくる。俺は皿を片手に、レイアに向かって空いているもう片方の手を上げた

「いや別に。部屋に帰って食べようかと思ってな」

「「えー！ 帰っちゃうの！？」」

なぜか俺の言葉にレイアとルイスが声をそろえて反応した。俺は怪訝な顔をして、垂れ目な二人に聞き返す。

「なんか問題あるか？」

「せっかく皆がロスト君の連続Dを祝うためにパーティ開いてくれたのに！」

「そうだよー！ クレイグ君が主役なんだからー！」

「お前ら俺を笑いたいだけじゃねーのか！？」

息びつたりに笑顔で人の心傷つけてくる天然コンビにツツコミを入れて、俺は食堂を後にした。

俺が食堂を出て向かった先は、学院の側に建てられている生徒寮だ。パーティを抜けてきたのは別にかかわれた事に気を悪くして、とかの理由ではなく、ただ単純に『契約の儀』という一生に一度あるかないかの大事な試験の勉強をするためだ。

実技の成績が最低な俺は筆記の方で点を稼がないと退学になってしまったため、今でも学年百五十人中で十番くらいには入っているのだが、寮に到着する直前となってエニグマについて書かれている本は自分の部屋には置いていなかったことを思い出す。

「……図書館行くか」

幸い図書館は生徒寮の近くにある。すぐに勉強できるようになるという配慮だろう。

俺は寮の自室に飯を置いて、図書館へと向かった。

「相変わらず古臭いところだな……」

俺は重い櫨の木で作られたアンティーク調の扉を見て、小さく呟いた。

ギィ…と重い扉を押し開けて中に入る。

蔵書数は十一万冊と多いのか少ないのか良くわからない数の本が納められた本棚の間を縫うように歩いていき、エニグマ関連の本が収めである場所へと向かった。

しかし、

「あれ、アイツ…」

先客がいた。それも今まで何人もの優秀な魔獣使いを世に送り出してきたエンテイクスト学院で実技と筆記をともし一位をとり続け、史上最も優秀とまで言われる女。

同じグリフォンクラスに在籍しているセレン・アルジェだ。

きれいな顔の中にアメジスト色の瞳を持ち、透き通るような金髪を頭の後ろで結んで、もう十時ごろだというのに、まだ制服を着ている。

俺の目的の本が置かれている側の机の上に、大量の本を積み上げて何やら勉強をしている風だった。

だが、俺には関係ない。そう思ってアルジェの後ろの本棚に足を運ぶが、そこで俺は絶句する羽目になる。

なぜなら、俺が目的としていたエニグマ関連の本の部分だけが、本棚からごっそりと抜き取られていたからだ。俺はゆっくりと首を動かしてアルジェの机の上に置かれている本の山を確認する。

『エニグマノ全テ』 『エニグマとは』 『魔獣大全』 『エニグマ編』 『契約の儀』 『魔獣の扱い方』 『魔獣外装解説』 『エニグマ地理』 etc…。

俺が借りようと思っていたエニグマ関係の本、その全てがそこにあった。

「……………おい、アルジェ」

声に微かな怒気を孕ませて、俺は目の前にいる優等生の名を呼んだ。だが、アルジェは気付いてないかのようにカリカリと羽ペンを動かしている。

俺は深いため息をつく、さっきよりも大きい声でもう一度話しかけた。

「あのよ！ ちょっといいか？」

だが、アルジェは全く反応しない。

「おい、セレン・アルジェ！！」

その態度にイラついて三回目は話しかけるだけではなく、金髪の横に移動して、ダン！ と机を叩いた。

それでやっと気付いたかのように、アルジェは顔を上げると俺にアメジストのような瞳を向ける。

細い眉に大きな二重の瞳、鼻筋もよく通っていて、桃色の唇はふつくらとしているその顔に俺は図らずも一瞬だけ見とれてしまう。肌もキメ細やかですべすべしてそうだ。

「なに？」

アルジェは短く聞き返してきた。その視線で、勉強の邪魔をするなと暗に訴えてきている。

ここで、アルジェが気の強い自己中心的な女だと俺はようやく思い出した。

成績は良く、顔もいいのに、誰も寄せ付けない性格のせいでいつも一人のこの女のあだ名は確か『氷姫』。

ようやく反応してくれた氷姫様に俺は文句をつけた。

「一人でそんなに本を持ち出すのはどーかと思うんだが」

「だからなに？」

「図書館の利用規定にもあんだろ？ 一度に持ち出せる本は三冊までって」

「ここはまだ図書館の中、問題あるの？」

「は…？」

「だから、持ち出し規定は図書館外に持ち出す場合。私は別に違反してない」

声色を全く変えずに淡々と喋りきるアルジェ。

このままでは本を一冊も借りられそうにないので、俺は方法を変えることにした。

「お前の言い分は分かった。一つ質問なんだが、今勉強してんだよね？」

「そうだけど」

「なら、終わったやつあるだろ？ 俺も勉強したいから貸してくれ」

頭を下げた俺を、アルジェはまっすぐに見据える。

急に見つめられパチパチと瞬きをする俺に、アルジェは本の山から二冊取り出して俺の前に置いた。

「これ、私は読んだし…分かりやすかったから」

「え？」

あの氷姫がこんなに聞き分けがいいとは思わなかったため、間抜けな声で聞き返した俺だが、アルジェは再び羽ペンを持つと勉強を再開してしまった。

俺の前に置かれた本を手にとって見ると、背表紙には『エニグマ地理』『契約の極意』と書かれている。

「今まで全く話さなかったけど、意外といい奴なんだな。ありがとう」
「ッ!？」

俺が礼を言つと、アルジェの背がピクリと動いた。だが、特に返事をされる気もなかったので、俺は本を抱えながら図書館を後にした。

だが、俺に礼を言われたアルジェが一瞬動きを止めたのはなぜだろうか。心なしか頬も赤くなっていたような気がする。首をひねりながら、俺は自室へと急いだ。

寮の玄関を通り、グリフォンクラスの男子居住区に戻ると、まずパーティーからくすねてきた料理をすぐにたいらげ、氷姫推薦の本を広げた。

最初は『エニグマ地理』からだ。

今日から契約の儀までは授業はない。契約の儀とは、よく体を休め、予習をし、万全の体制で臨むべきもの。そういう考えがエンティクストでは標準なのだ。

そう考えると聖戦の時の魔獣使いたちはすごいと思う。ぶつつけ本番でエニグマまで行ってパートナーとなる魔獣と契約してきたのだから。

頭の片隅で思考しながら、俺は本の中身を頭に叩き込んでいく。まずはエニグマ全体の大まかな地理を、その次は各場所に生息する魔獣を。

本一冊の内容はかなりのもので、それらを全て覚え切ったところにはもう日にちが変わってから二時間が経っていた。

ルイスたちは食堂で眠ってしまったのだろう。帰ってきた気配はない。

「…もうこんな時間か。……………はあ…」

俺は壁にかけられた時計を見ながらため息をつく。

本を一冊覚えるのにこんなに時間がかかるとは思わなかった。だが、アルジエはこの本を読んだと言っていた。

今日は実技があつたから図書館にこもっていたのは長くても九時間くらいだろう。それであの本の山を築いたというのなら流石という他はない。

俺は眠気を吹き飛ばすように両頬をぺちぺちと叩くと、『契約の極意』を手にとった。

本のタイトルからして契約を成功させるために必要なことが書かれているはず。

俺は表紙をめくる。

そして、それを読み終わつたときにはすでに朝日が昇っていた。

四話（前書き）

誤字脱字がありましたら、ご指摘お願いします。^^

四話

結局一睡もせず夜を明かした俺は、談話室で椅子の背もたれに体を預けている。

すると、寮の入り口の扉が開き、グリフォンクラスの居住区にたくさん生徒がなだれ込んできた。

俺は驚いたが、そいつらの顔をみて苦笑いする。

昨日、食堂で騒いでいた奴らだったからだ。どうせ皆そろって眠ってしまい、朝の清掃に来た使用人に追い出されたのだろう。

「おはよー、ロスト君…」

徹夜明けで眠さを感じなくなっている俺に、死人の集まりのようなグループから出てきたルイスが話しかけてきた。ふらふらと足元もおぼつかない。

俺は立ち上がると倒れそうになったルイスを支えて、さっきまで俺が座っていた椅子に座らせた。

「ああ、おはよう。みんな揃って昨日は何をしてたんだ？」

「えっと…、ジャック君がお酒の飲み比べしよーって…」

「理解した。よくがんばったな」

ジャックが全ての諸悪の根源なのだろう。

この前もそうだったのだ。こいつがどこから酒をくすねてきて皆に振舞ったのだ。皆が酔いつぶれるまで吞ませるくせに自分はどれだけ呑んでも酔わないのだから性質がわるい。

下手すれば酔いつぶれたあとも無理やり口に酒を注ぎこむのだ。

もう一度、死人グループを良く見てみると、ジャックだけは元気そ

うにしている。

「ジャック。ちょっとこっち来い」

「？　なんだよロスぶおっ！！？」

のこのこと近づいてきた馬鹿ジャックの鳩尾を蹴り上げて吹き飛ばしてから、俺は談話室の端にある水差しからコップに水を注ぐと、それをリュスに差し出した。

「ほら、飲め」

「うう…、ありがと…、うっぷ…！」

「吐くならトイレに行け！」

吐きそうになったリュスだが、なんとか堪えたようだ。

ゼーはーと息を荒くするリュスの背中を擦りながら予定を告げる。

「俺、図書館に本返してくるから」

「うん…、いつてらっしやい…」

自室から『エニグマ地理』『契約の極意』を手に取り、まだ肌寒い季節なので、薄いが保温性の高い黒のロングコートを制服の上から羽織る。

クレイグ家の衣装棚に入っていたものなので結構な値打ち物だということとは分かるが、他にもっと高価そうなのが並べられていたので持ってきてしまった。

ロングコートのポケットに本を無造作に突っ込んでから、俺は図書館へ向かった。

昨日の夜と同じように本棚の隙間を縫って、エニグマ関連の本が納められている場所へ向かう。
が、そこで今日二度目のため息をついた。

「こんなところで寝てるのかよ」

氷姫ことアルジェが、机の上に突っ伏してすやすやと眠っていたのだ。しかも本の山が昨日の二倍くらいの高さになっている。とりあえず、ロングコートから本を取り出して本棚にしまうと、熟睡しているアルジェを起こさないように本の山も片付けた。

同じグリフォンクラスだからな、別に寝顔が可愛かったからじゃないぞ！ と心の中で自分に言い訳をする。

「くしゅん！」

「うお！？」

アルジェのくしゃみに少し驚く俺。

いかに氷姫とはいえ、こんな暖炉もない図書館で寝ていたら風邪をひくだろう。

着ていたロングコートをぬぐと、ふぁさり…とアルジェにかけてやる。この恥ずかしい行為も俺がアルジェにコートを返せと言わなければ闇に葬られるはずだ。

「（本を貸してくれた礼だ…。意外とためになったしな）」

ひそひそと呟いて自虐的な笑みを浮かべる。

子供のように眠るアルジェだが、こんな優等生と落ちこぼれがもう関わることもないだろう。

俺はもう一度だけ氷姫…こうやって寝ているところだけ見ると眠り姫のようなアルジェの寝顔をちらりと見ると、寝なおすために寮へ

と戻った。

「あゝ…、ロストくん…」

「まだ二日酔いなのかよ…。俺はもう寝るから夜になったら起こしてくれ」

いまだに死人の雰囲気醸し出しているルイスに呆れた視線を向けると、俺は談話室のテーブルからクツキーを幾つか持って自室への階段を上る。

ポリポリとクツキーを全て胃に収めると、俺はベッドに倒れこんだ。今まで全く無かった眠気が急にまぶたを重くする。

ぷつん…と、糸が切れるように、俺は眠りの世界へと旅立った。

「ロスト君、ロスト君！」

「くぁ…ルイスか？」

俺は体を揺すられて起き上がると、大あくびをしてから自分を起こした人間の名を呼んだ。

二日酔いが治った気の良いクラスメイトは困ったように笑うと、俺の前に黒い布のカタマリのようなものを差し出してくる。

俺は訝しげにそれを眺めるが、次の瞬間。

「おわあ！？ 何でこれがここに！？」

ルイスが持っていたのは綺麗にたたまれた黒いロングコート。そう、俺がアルジェの肩にかけてやったはずの、あのロングコートだ。それをルイスが持っているということは…。駄目だ、脳がその先を想像することを拒否している。

「アルジェさんからロスト君に返してくれって言われ——」

「黙れコラア！！！」

ベチンツ！ と俺が想像しなくなかった事実を一瞬で口にしゃがった馬鹿の脳天を思いつきりはたくと、俺はロングコートを布団の下に突っ込んだ。

だが息を荒くする俺に、ルイスは更に追撃を開始する。

「いやあ、でも僕おどろいちゃったな。まさかロスト君がアルジェさんとあんな仲だったなんて」

「あんな仲ってなんだ！？」

「え？ あのロスト君が自分の着てるものを優しく差し出すような関係だよ？」

「誤解！！ つーか今日一日の記憶を全て失え！！！」

「男子寮の談話室にまで来てたから、皆もおどろいてたよ」

「あいつらも見てたのか！？」

「いままで教室でも誰とも話さなかったあの氷姫様をいつのまに落としたんだよ！ ってジャックくんが怒ってた。でも本当にいつ仲良くなったの？ あのアルジェさんと」

「落としてねえよ！ だいたい怒られる筋合いもねーし！ 仲良くもなつてない！」

「…まあ、いいや！ そろそろ食堂に行かないとご飯なくなっちゃうよ？」

「……………最初の間はなんなんだ」

いつもおとなしいルイスがこんなに過敏に反応してくるとは思わなかった。

「というかアルジェはなんでロングコートが俺のだと分かったんだろう。」

「うーむ」と、本気で悩み始めた俺にルイスがポケットから何かを取り出して俺に差し出してきた。

「手紙？」

「うん。アルジェさんがロスト君に渡してくれて。あ！もちろん中身は見えないよ？」

「見てたら殺してる」

怪訝な顔をして俺は手紙を受け取った。白い封筒で、その厚みからして中身は一枚だろう。

俺はそれをどうするべきか少し逡巡した後、

「ルイス、ワリィンだけど俺の飯取ってきてくれないか？ お前が飯食った後でいいから」

食堂には行かないで手紙を読むことにする。

中身が気になるし、何より食堂に行ってジャックにでも会ったらアルジェとの関係について一晩中追求されかねない。まあ、あいつらの思ってることは全て誤解なのだが。

そんな俺の胸中を理解してくれたのか、ルイスは快く頷いてくれた。

「分かった。じゃあ一時間くらいでまたロスト君の部屋に来るから」
「ああ、頼む」

「この皿も持っていくね？」

そう言つてルイスは昨日の夕食を乗せていた皿を持つて部屋から出て行つてくれた。

俺は、足音が聞こえなくなるのを確認してから、手に持った手紙に視線を落とす。

蠟で封をしてある。くるりと裏返すと綺麗な文字で「セレン・アルジェ」と綴られてあつた。

「ラブレター…？ いやでもあの氷姫がんなことするわけねーか…」

一瞬だけ思春期特有の淡い期待を抱いてしまった俺だが、すぐに「それは無いな」と首を振つた。あの氷姫がそんな可愛いことなにかした日には、空からファイアーボールが降ってくるのかと思つてしまう。

俺は部屋の机の引き出しを開けると、中からペーパーナイフを取り出した。

それをスツ…と蠟の下に滑らせて封を切ると、ゴクリ…と唾液を飲み込んでから便箋を開く。

俺は恐る恐る便箋に目を通し始めた。

——ロスト・クレイグ——

「いきなり呼び捨てかよ…、まあいいけど」

——外套を貸してくれたことと、本を仕舞つてくれたことに感謝する——

「…それだけかよっ!？」

書かれていたことはそれだけである。俺は脱力してベッドの上に倒れこんだ。

そして思いの外、自分が手紙に期待していたことに気付き失笑する。だが、ベッドの上でもう一度頭上に便箋を掲げたとき、その右隅に何か小さく書かれているのを見つけた。

——…一応言っておく。ありがとう——

ガバツ！ と俺は勢い良くベッドから起き上がってもう一度文面を確認するがその言葉は消えなかった。

俺は、あの氷姫でもお礼とか言うんだなーと地味に驚いたが、手紙をもう一度封筒に仕舞うと、引き出しの奥に入れておく。

おそらくこの学院で初めてアルジェから手紙をもらったのだ。そのくらいしても罰は当たるまい。

いつのまにか無意識にニヤついてしまったが、俺は気を取り直すと時計を見る。

「まだルイスが帰ってくるまで四十分くらいあるな…」

仕方がないから図書館で物語でも借りてこよう。そう思って俺は自室を出た。

この時、俺がロングコートを羽織った理由はなんとなくである。

決して、やましい気持ちなどではない。…ほんとだぞ！？

もちろん、図書館にアルジェがいるということは無かった。…少し期待していたけど。

四話（後書き）

感想など書いてくれると嬉しいです>><

閑話 聖戦

「あのさ…リク」

《なんだ？》

黒い髪と翡翠色の瞳を持つ一人の魔獣使いが、隣にいる巨大な獅子に話しかけた。

はあ…と魔獣使いの青年はため息をつく。

「魔法使い五千人と魔獣使い二十万人の戦争でさ…、なんで俺一人で三千人を相手にしなくちゃいけないんだ？」

《百倍の数じゃねーと勝てねえって思ってたんだろ？》

獅子が呆れたように答える。

青年と魔獣の目の前には大きな扉があった。扉の奥には魔道王とその側近が率いる三千人の魔法使いが待ち受けているだろう。

青年は更に嘆きながら獅子の体に手を当てる。

「大体…まだ魔獣使いは弱すぎだよな…。魔法使いに反乱起こせるレベルじゃないってのに焦りやがって…。俺がいないと話にもならないじゃねーか」

《…そろそろ乗り込まないと二千人が帰ってくるぜ？》

「これ以上増えられてたまるかッ！ リク！ 『魔獣外装』！」

半ばキレ気味に青年が叫ぶと獅子の体から光が滲み出し、青年の右手に収束して一本の刀が生み出された。

白銀の刀身に金色の模様が刻み込まれた美しい刀を青年は上段に構えると、扉に向かって無造作に振る。

次の瞬間。バチィッ！！と刀から生み出された雷が扉を吹き飛ば

した。

青年は獅子の背に飛び乗ると、刀を握る手に力を入れる。チヂチヂヂヂッ！ と紫電の光が刀身に走りスパークした。

《盾はいらねーのか？》

「お前が防いでくれるって信じてるよ。『最強の雷獣』さん」

《クハハ！ 任せろ。始まりの魔獣使い！》

獅子の笑い声が空気を震わせた。獅子の後ろ足の筋肉が力を溜めて爆発的な加速を生み出す。扉を潜り抜けると奥は更地になっており、その青年一人を倒すために砦の一つをつぶしたことが察しられた。三千人の魔法使いが半円状に青年と獅子を囲む。

だが、青年はそれに臆した様子を見せない。それは獅子も同様で、止まるどころか更に加速して魔法使いの群れに突っ込んでいく。

「奴をここで仕留めねば我らの負けだ！ 第一陣！ 放て！」

指揮官らしき敵の男が空に炎球を撃つのと同時、千人ほどの魔法使いが一斉に攻撃魔法を打ち放つ。七色の光の奔流と見紛うばかりの様々な攻撃魔法は青年と獅子を粉微塵に変える——はずだった。

《邪魔だア！》

獅子が吼える。契約者の青年以外にはただの鳴き声にしか聞こえない咆哮だが、それは畏怖を抱かせるには十分であった。

《『迎雷壁』！！》

バチチチ！！ と獅子の体から電撃が溢れ出し、全ての攻撃魔法を迎撃した。光が幾つも炸裂し、辺り一面を埋め尽くす。

青年の視界も光が覆ったが、それに構わず青年は刀を横一文字に薙いだ。チチィッ！ 刀から雷が迸り、正面にいた魔法使いを一度に百人ほど消し炭に変える。

「まずは百人か…」

だが、青年の攻撃はそれだけでは終わらなかった。

刀を振り切った体勢から、今度は雷を纏った斬撃波を他の集団に叩き込む。空を切り裂いて飛んだ斬撃波は地面に着弾すると同時に雷の嵐を撒き散らし、着弾地点から周囲五十メートルほどの魔法使い全てを焼き尽くした。

「五百は逝ったかな？ これで——」

《六百！ 残りは二千四百！》

獅子は口を大きく開くと太い雷の矢を飛ばす。

狙いは周囲一面更地となっている中で唯一の高台。おそらくは魔道王がいる場所。

だが、どんな矢よりも速く雷速で飛んだその雷矢は、高台にぶち当たると直前に掻き消える。

それに獅子が驚愕の色を交えて呟いた。

《…オレの雷閃が消されたぞ？》

「多分魔道王の『左腕』^{シンストラ}だよ。もともと天才的に魔術の腕があるくせにその容量を全部防御に割り振った変わり者」

攻撃魔法は一切使えないけどな…と呟きながら魔法使いを消し飛ばし続け、青年は高台に目を向ける。

接近戦が得意ではない魔法使いが人海戦術を使う時点で負けは決まっているようなものだ。

ただ、『^{シニストラ}左腕』の対となる攻撃魔法のエキスパート『^{デクストラ}右腕』に限ってそれは当てはまらないが。
獅子が魔法使いの集団に突っ込み、青年が消し飛ばす。それを三分ほど続けると魔法使いの数は千人ほどになっていた。

「残りは千か…」

《さっさと終わらせよーぜ！》

「ああ、そうだな！」

青年は獅子の言葉に合わせて、刀に纏わせる雷の量を十倍以上にする。残りの魔法使いは散り散りになっているため、その半分に照準を合わせ、刀に残った雷の力を五百等分して解き放つ。
刀から五百条の雷光が轟音とともに溢れ出し、五百人を一瞬で焼き殺した。

だが、力を全て解放した刀は砕け散って光と消える。

「魔道王がさっさと出てきてくれれば楽なんだけど」

「お前如きに王が出るまでもない」

「！！ リク！」

青年が呟くのに獅子が反応するより速く、青年の後ろでそれに答える者がいた。

すぐさま刀を再構築するが、背後の襲撃者のほうが一瞬早い。爆風が青年を獅子の上から弾き飛ばす。

その後、襲撃者は獅子にも攻撃を加えようとするが、獅子が体から全方位に放電したため慌てて飛び退る。

青年は空中でバランスをとってうまく着地し、襲撃者と向き直った。

「…へえ、驚いた。『^{デクストラ}右腕』って女だったのか」

青年の前にいたのは全身を黒布で包んだ背の高い女性だった。

獅子は青年の側に近づき、青年は獅子の背に飛び乗る。

驚いたと言いながらまるで驚いている素振りを見せない青年に、右腕は忌々しげに舌打ちした。

「よくも、高貴なる我が同胞の半数を…屠ってくれたな！」

「高貴？ それなら何故下賤なる血の平民に、こつも好きにやられるんですか？」

「黙れ！！ 魔道王の右腕エルド・マギクス・イレイナス！ 参る
！」

「…ニード・クレイグ」

『エイン・テイマー始まりの魔獣使い』 & 『アストラ・リクス最強の雷獣』 VS 『マギクス・デクストラ魔道王の右腕』

三百年後には歴史の影に埋もれてしまう戦いが、今始まった。

轟！！ と巨大な炎球を『マギクス・デクストラ魔道王の右腕』エルドは『エイン・テイマー始まりの魔獣使い』ニードに叩き込もうとする。

だが、ニードは刀の一振りで炎球を吹き飛ばした。

返す刀で、エルドに雷撃波を飛ばすが、エルドは落ち着いて回避する。しかし、『アストラ・リクス最強の雷獣』、通称リクが高速でエルドの背後に回りこむと、その巨大な前足の爪を振るった。

しかし、エルドもさることながら、炎の盾を生み出して爪を受け止める。

《あつちい！》

たまらず、リクは爪を引っ込める。

エルドはリクがひるんだ一瞬の隙を見逃さなかった。

刹那の間に空を埋め尽くすほどの様々な攻撃魔法を生み出し、それを一点に収束させる。

「『ロンギヌス神殺し』！」

全ての属性を無理なく統合させたその槍の色は漆黒。神すら無に帰す混沌の象徴だ。

エルドは躊躇なくそれをニードに撃った。

《ヤベエ！ もっと生気をよこせ！》

「わかつてる！」

焦りながらも、リクは自らの最強の盾をニードに持たせる。そして、リクの体からあふれた光が盾の形を取るのと同じ時。

カツツツツツ！！！！と凄まじい轟音が周囲に響いた。

盾は『ロンギヌス神殺し』の力を受け止めるのではなく受け流す。

『ロンギヌス神殺し』と盾が衝突した瞬間。ニードの周囲三メートルほどを覗いて辺り一帯が消し飛んだ。

「今ので四百人くらい死んだけど……」

「栄光への礎だ！」

「……ずいぶんな言い草だな」

盾に渡していた生気を全て刀に移動させる。能力を発生させるための生気は有限だが、同じ魔獣から生み出された魔獣外装ではその譲渡ができる。

チツチツチツ！！と刀の周囲を走る紫電が規則的に明滅する。ニードはそれを大上段に振りかぶると、全ての力を一撃に込めた。魔獣外装と呼ばれる武器は込められた力を使い切れば碎けてしまう

が、命を削れば生氣は生み出せる。

普通の魔法使い千人ならば一瞬で塵も残さず消し飛ばせるほどの力を、ニードはエルドではなく、魔道王のいる高台に向けた。

「な！？ やめろ！！」

「『ジャッジメント 雷王の裁き』！！！」

エルドが焦った声を出すものの、ニードはためらわずに刀を振り切った。刀は砕けたが、キュアッ！ と凝縮された一撃が高台に向かい、ニードの予想通り『シニストラ 左腕』の障壁がそれを受け止める。が、リクの雷矢すらかき消した障壁も、『ジャッジメント 雷王の裁き』は受け止めるだけで精一杯だったようだ。バキャンッ！ と障壁が砕け散る。

「リク！ 走れ！」

《オオ！》

「待て！」

リクが矢のように駆け出す。

エルドは魔力を『ロンギヌス 神殺し』に全て喰われ声を上げるしかできない。ザッ…と、ニードは高台の上に降り立った。

「…こういうことか」

結論から言うと、高台の上にいたのは二人。

一人はベッドの上に横たわる瀕死の老人。もう一人は、その脇で倒れている白い布で全身を覆った女性だ。こちらは死んでいるだろう。それを見て、ニードは全てを悟る。

ただの魔法障壁で『ジャッジメント 雷王の裁き』が受け止められるはずがない。その命を魔力に変換した最後の砦だったのだ。

瀕死の老人、おそらくは魔道王が咳き込みながら体を起こした。

「ゴホゴホッ…！ エルドは…どうした？」

「殺してはない。魔力は切れてるみたいだけど」

「そうか…。礼を言う」

「なんでだ？」

「エドラは私のために死んでしまった。エルドまで死ぬことはない」

「…俺はお前を殺す」

「わかつている…。だが…、その前にやるべきことがある！」

老人…魔道王は一喝すると、自らの胸に短剣を突き立てた。紋章が短剣の柄から現れ、光り始める。

ニードは止めようかと一瞬逡巡したが、世界を収めていた魔道王が成す最後の仕事だと思い、高台からエルドの元へ戻った。

「魔道王は死ぬなって言ってたよ」

「……………糞ッ！」

悪態をつきながら涙を流すエルドに、ニードは言う。

「逃げなよ、今生き残ってる魔法使いは生かしておくから」

「…感謝する」

エルドは、一度だけ頭を下げると、他の魔法使いとともに去っていった。

ニードは、リク以外には死体しかない場所で、ポツリと呟く。

「こんな殺人鬼に、感謝なんかするなよ——」

《なんか言ったか？》

「なんでもない。行こうか、リク」

《ああ！ うまい飯が待ってる！》

「食べ過ぎるなよ？」

—— 黒い髪と翡翠色の瞳を持った青年が魔道王の死に際を見届けて六十年——

—— 魔獣家の育成に力を入れる名門、クレイグ家を作り、ニードは息を引き取った。しかし、主人が死ねばその魔獣も死ぬはずだが、リクと呼ばれる獅子はニードが死ぬ前にどこかへ消えたという——
！。

閑話 聖戦（後書き）

零話だったものを閑話として投稿しました汗

すみません汗

五話（前書き）

誤字脱字がありましたら、ご指摘お願いします

五話

俺はグリフォンクラスの男子どもからアルジェについての追及を逃れながらも三日間を過ごし、やっと契約の儀の当日を迎えた。

「朝の九時半にゲート前の大広間に集合。今九時なんだけど、ルイスー！？ まだか！？」

俺はルイスの部屋の前でドンドンと乱暴にドアをノックしながら、声をかける。

「ごめんねー！？ あと三分だけ待っててー！」

「急げよ？ 今日遅刻したら退学だぞ？」

「わかってるってー！」

『契約の儀』は普段の授業とは違って、特別な理由が無い限り時間厳守だ。遅れでもしたら即退学。欠席なんてもってのほかである。それなのにルイスときたら何故か部屋に閉じこもって何かを用意している。

早いものなら二時間前に大広間に向かっているはずだ。だが、ルイスが「待ってて」と言ってから一分ほどで、

「ごめんー！」

「うお！？」

ピンボーゆすりしながらルイスの部屋のドアに背中を預けていると、

いきなりガチャリとドアが引かれ、俺はバランスを崩してしりもちをついた。

イタタ…と己の尻を擦りながら、ルイスを恨めしげな視線で見上げる。

「何しやる!」

「ご、ごめん。まさかドアによっかかってるなんて思わなかったから…」

「ったく…三分って言ったのはお前だろうが…」

「あ、あはは。それより早く行かないと!」

「っーかお前何を用意してたんだよ?」

「うっん、着替えてただけだよ。寝坊しちゃって」

俺もルイスも制服を着ているが、ルイスの制服は白い下地に青のラインが入ったブレザーというもので特に変化が見られない。

生徒によつては制服にプロテクターをつける奴もいるからルイスもその類だと思つたのだ。

契約の儀で契約を成功させるにはエニグマで魔獣に生氣直接受け渡さないといけない。ルイスのような身体能力のそう高くない者は、契約したい魔獣の戦闘力が高いと暴れられたときに怪我するからつけることが多いのだ。

話をそらそうとしたルイスに不思議に思つて質問したが、軽く受け流されてしまった。

だが、こんな話をして遅刻で退学とかになったらシャレにならない。

「まあ、いいけどよ。んじゃさつさと行くぞ?」

「うん!」

エニグマに通じる道『ゲート』が設置されている講堂『大空』。
俺はルイスを伴って、『契約の儀』開始の十分前に大空に到着した。
中ではすでに百五十人ほどの生徒が、契約の儀を今か今かと待ち構えている。俺はゲートを中心として半円状に広がっている生徒の後ろに紛れ込んだ。

「間に合ったみたいだな？」

「うん。大丈夫だったでしょ？」

「威張るな。全員二十分前には来てんだよ」

なぜか胸を張るルイスに冷静なツツコミをしていると、ゲートの門が設置されている壇上に初老の男性が現れた。

粗野な風貌に白髪と短い無精ひげ。まるで歴戦の老戦士のようなが、れっきとしたエンテイクスト学院の学院長であるヴァレイグだ。側にはヴァレイグの魔獣である氷狼『フェンリル』が付き従っている。

ヴァレイグは壇上の中央まで歩み寄ると、生徒をぐるりと見回した。そして、口を開く。

「ついに…この日が来た」

ただ、普通に喋っているだけ。

しかし、伝説の氷狼を従える魔獣使いが放つプレッシャーは少しざわめいていた生徒たちを黙らせるだけの迫力があつた。
シン…と講堂が一瞬で静まり返る。

「人には各々、短い人生の中でやらねばならないことがある。そして、それを成すための助けとして、一生を共にする魔獣と契約するのだ。それを…忘れぬようにしろ」

「………はい！」

威厳たつぷり学院長の言葉に、エンテイクストの生徒が全員——いや、俺を除く全員が元氣良く答えた。まあ、氷姫なんて渾名をつけられているアルジェが返事していたかはわからないが。学院長は満足げに頷くと言葉を続けた。

「それでは…契約の儀を開始する。各自順番にゲートをくぐり、エニグマへ向かえ。魔獣との契約が完了すれば自動的にこちらに送り返されるから心配はいらん。それと契約の儀以降のペアについては追って通達するのでそれを待つように」

それだけ言つと、氷狼とともに壇上から降りていくヴァレイグ。俺は横でなぜか胸を押さえているルイスに声をかけた。

「順番どーなるんだ？」

「うーん…。最後のほうになっちゃうかもねえ…」

「お前が準備に時間かけたからだな」

「っ…！ ひどいよロスト君！ そんな皮肉言つことないじゃないか！」

「事実だろ？」

笑い混じりに会話を続けていると、最初の一人が門の奥にあってゲートをくぐってエニグマへと向かっていった。

そいつがくぐるのと同じ、ゲートは強く発光してエニグマへの旅行者を送りだす。

それを横目で見ながらルイスが一言。

「瞬間移動みたい…」
テレポート

聞きなれない言葉を口にしたルイスに、俺は怪訝な顔をする。

「てれぽーと？」

「な、なんでもないよー。それより楽しみだな、どんな魔獣と契約するのかな…？」

完璧に話をそらそうとしたルイスに違和感を覚えたものの、ルイスのその後に言った、どんな魔獣と契約するのかな、という言葉が、違和感を不安で塗りつぶした。

なにせ俺は実技の全てで評価Dを宣告された『落ちこぼれ』である。魔獣と契約するためにはエニグマで素手から直接生気を流し込まなければならぬのだが、近寄っただけで逃げられてしまう俺はどうすればいいのか。

真剣に頭を悩ませ始めたが、誰かが俺の手を引っ張ったので我に戻る。

「ロスト君？」

「…ああ、悪い。ちょっと自分の暗黒の未来を想像しちまったんだ…」

「暗黒の！？ 大丈夫だって、学院長も言ってたでしょ？ 人生でやらなくちゃいけないことのために魔獣と契約するんだって。だからどんなに才能なくてもきつと契約できるよ！」

「……………お前心を的確にえぐってくるよな…」

そんな感じで会話を続けること二十分。

「やっと順番が回ってきたな」

「ロスト君…先にいく？」

「んじゃあ遠慮なく」

俺は背後のルイスに手を振って、壇上上がると目の前のゲートに足を踏み入れた。

光の壁のようなゲートに突っ込んでいくのはそれなりの恐怖を伴うが、勇気を出して足を前に出す。ズブリとゲートに体が飲み込まれていき、さらに一步踏み出すと、体全体が潜り抜ける。

白に埋め尽くされたゲートのなかを、俺は大またでズンズン進んでいく。

だが、歩き続けて三十秒ほどで急に視界が白から変化した。大きな建物がある、そう感じた次の瞬間。

「え？」

ドサッ！ と俺は重力にしたがって頭から地面に落下した。

どうやらゲートの出口が空中にあったらしい。頭を擦りながら空に目を向けると、光の渦のようなものが浮かび、それはだんだんと小さくなって消えていった。

「…なんでゲートの出口があんな所に…」

俺は恨めしげに呟くと、きよろきよろと周囲の様子を確認する。

まず、一番に目を引くのが目の前にある大きな…神殿のような建物だ。いや、神殿と呼ぶのはお粗末かもしれない。

だが、半透明の黄色い石柱が等間隔で一直線に並び、その上を石版のようなもので覆ってあるため、一応は道に見えるものが奥まで続いている。

次に俺は視線をその上、空へと向けた。

「……………おつかしいなあ」

空の全てを——いや、かなり遠くのほうは晴れているので語弊があるが——暗雲が覆い、雨は降っていないが雷が何度も落ちていている。

「エニグマの天候は基本的に晴れ」と『エニグマ地理』に書かれていたので俺は首をかしげた。

首をかしげながらも、俺は首を下に向ける。

「……………」

風が吹くと砂塵が舞う。乾いた茶色の大地の所々を灰色の石が彩っていた。

それを見て、今度は絶句する俺。

『エニグマ地理』ではなく、もう一冊の本『契約の極意』に書かれていた一節と、この光景が俺の頭の中で合致したのだ。

——荒野にあって命の気配は無く、天は稲妻の光のみ、雷の結晶で作られた社は、禍々しき雷獣の戒め。雷の化身の四肢を鎖で封ず、
其は——

「黄色い建物…荒野…雨雲…雷…。まさか…『雷獣の牢獄』!？」

——其は『雷獣の牢獄』なり——!

俺がゲートをくぐって着いた場所。

そこは…強大な力を持つ魔獣、七神獣の中でも最強と謳われた雷の神獣《雷獅子》が封じられていた場所だった――！

六話

「雷獣の牢獄…か。なんか変な場所に来ちまったけど…、どうするか…」

がつくりと肩を落としながら、俺はため息とともに呟いた。

なぜなら、ここ『雷獣の牢獄』に封じられていたはずの神獣は、すでに俺の先祖であるニード・クレイグが契約しているからだ。

《雷獅子》含め、学院長の《氷狼》などが分類される神獣種はエニグマにも一体ずつしかいない超希少種だ。

魔獣は契約主が死ねば己も死ぬ。ということは、ニード・クレイグが死んだときに雷獅子も死んでいるはずなのである。

そして、神獣がいる土地に他の魔獣は一切近づくかない。

以上のことから…、この近くに魔獣はいない、ということが推測されるのだ。

「…俺がここに飛ばされたのにはなんか意味があるはずだ！ とりあえず…前に進む！」

ネガティブな想像を頭の中から追い出し、俺は大声を出して気を引き締めると、キッ！ と奥へと一直線に繋がる牢獄の道をにらみつけた。

深く息を吸ってから、一息に走り出す。

ダッ！ と地面を蹴って前へと進むと俺は牢獄の中へと足を踏み入れた。

左右を柱に挟まれた道はなだらかな傾斜になっており、少しずつ地下へと向かっている。

だが、一分ほど順調に走り続けていた俺だが、思わぬトラップに引つかかってしまった。

「!？」

なだらかな傾斜だったはずの道が急に深い段差に変化する。

それ自体は単なる階段だったのだが、ここでよく考えてみよう。階段を下りるときに猛スピードで突っ込んでいったらどうなるか。一段一段が低く、幅も広い階段ならば俺は駆け抜ける自信があった。しかし、一段の高さが三十センチ弱。幅も同じ程度の階段で同じことをすれば？

結果は決まっている。

今の俺のように、転げ落ちるのみだ――。

「うわあああああああああああああああああ!!!」

ズドドドドドドドド!! と俺は叫び声を上げながら落下していく。とつさに頭を手でかばい、足をまげて衝撃を和らげようとする。しかし、それが仇となった。全身に階段の角が当たり、さながらリンチを受けているような痛みが走る。体を丸めたために落下速度は大幅に増し、俺はノンストップで落下していく。

階段の横にあった松明の明かりが無くなり、まぶた越しに闇を感じた直後、俺の体はボツチャーン! と盛大に水の中へと突入した。

(……水!?)

パニックに陥りそうになるも意識を切り替え、手足を動かして水面に顔を出す。

立ち泳ぎをしながら首を左右に動かして状況を確認すると、暗闇の

中におぼろげな明かりが見えた。そう遠くはなさそうなので、平泳ぎで顔を水面に出しながら泳いでいく。

この時点で階段まで戻るという選択肢はなくなっていた。道は一本道で分かれ道などなかったし、水中に入った時点でどこに階段があるのかもわからない。

泳いでいると、明かりがだんだんと近づいてきているのがわかった。コツン…と手の先に何か硬いものがぶつかる。どうやらそこからは陸地…というのも妙な表現ではあるが、石の床のようなものが広がっていた。

「あの光はこの先だな…」

小さくつぶやいて俺は体を水から引き上げる。

びしょびしょの上着を脱いでからきつく絞り、ぼたぼたと水分を外に出すことで軽くした。それを羽織らずに腰に巻いてから俺は明かりのある方向に歩き出す。

トコトコと一分ほど歩くと、明かりの近くに到着した。明かりの正体は大きな燭台のようなもので、その上ではオレンジ色の炎が風に揺らされることもなく静かに光っている。

燭台とはろうそくをさしておく台のようなものだ。

燭台の大きさは俺の背丈と同じくらいなので170センチ。炎を足せばプラス40センチといったところか。

俺は少し警戒心を強めながら燭台に触れてみる。

すると、ボツボツボツボツボツ！ と。目の前の燭台を起点にして円形に並べられていた燭台に規則的に火がついた。

一つだけじゃなかったのかよ！ と叫びたくなる衝動にかられたが、それを何とか押さえ込んで、点灯された燭台を一つずつ目で追っていく。

円形に並べられている燭台の規模はそんなに大きくはなさそうだが、燭台の数は二十本ほどで燭台同士の感覚は大体10メートル前後。そう結論付けようとした俺だが、燭台の裏で何かが光るのを見つけて眉をひそめる。

すべての燭台の裏、そこから鎖が円の中央に伸びていた。そしてその鎖は、炎の光を受けて金色に光る体毛を持つ獣の四肢を封じている。

獣の大きさは巨体と言い表すに十分で、一噛みで人の上半身を食いちぎれるだろう。

「…まさか…雷獅子!？」

つぶやいた直後、いや、そんなはずがないと俺は自分の考えを否定した。

雷獅子はこの世にいるはずがないのだ。
今まで魔獣使いと契約した神獣は三体。

三百年前に雷の神獣《雷獅子》がニード・クレイグと。
二百年前に風の神獣《嵐鳥》がロゼリア・フィードと。
五十年前に氷の神獣《氷狼》がヴァレイグ・クロスと。

そして、嵐鳥は魔獣使いが死ぬのと同時に風となって消えている。
雷獅子については、家に伝わる伝承で、ニード・クレイグが死ぬ前にどこかに消えたと言えられているが、嵐鳥と同じように自分の司

る属性となつて消えたはずだ。

だが、その獣の姿は凄惨なまでに美しかった。

——炎の光で煌く鬚。たてがみ

——力強い彫刻のような筋肉

——金色に輝く体毛

その全てが醸し出す神々しい雰囲気、静かに横たわる獣が神獣であることを物語っていた。

ゴクリ…と口内に沸いてきたつばを飲み込んで、俺はゆっくりと獣に近づいていく。

円の中心にいる獣まであと半分というところで、今まで微動だにしなかった獣が動きを見せた。

獣は頭を持ち上げ、俺のほうに顔を向ける。

俺の姿を確認すると、獣は重たそうに立ち上がった。獣の体を縛る鎖がジャラジャラと音を立てる。

獣の金色の瞳が俺を射抜いた。

そして、

《…お前…ニードか？》

「！？」

獣が口を開き、声を発したことに俺は驚く。

魔獣使いと契約していない魔物は言葉による意思の疎通はできないはずなのだ。

いや、だがその前に。今あいつはなんと言った？ 俺は先ほど聴いた言葉が聞き間違いではないかと何度も記憶を反芻する。

だが、なんと思いつ返しても獣は俺の先祖の名を言っていた。

俺は驚きながらも獣に聞き返す。

「今…なんて言った？」

《？…あア》

獣は怪訝そうな顔…というか雰囲気をしたがすぐに得心が言ったかのように一度頷いた。

《ワリイな。あれから何年経ったのかは知らねえが、ニードはとつくに死んじまつてんだろ。だから俺はここにいるんだからな》

「…よくわかんないんだけど…。ニード・クレイグは俺の先祖だぞ」

《先祖！　クハハハ、そーかそーか！　お前、ニードの生まれ変わりが！》

「…は？」

なにか今とんでもない言葉が聞こえた気がする。

俺が訝しげな視線を獣に向けると、獣は楽しそうに笑いながら言葉を続けた。

《その髪と目の色。おまけに顔までそっくりだ！》

「悪いんだが何を話してるのかまったく分からん」

《お前はニードの生まれ変わりってことだ。ゲートが牢獄コウに開いたのがいい証拠だ》

「だから生まれ変わりとか言われても困るんだよ！　俺が始まりの魔獣使いの生まれ変わりなわけない！」

《なんでだ？》

唐突に生まれ変わりとわれ、俺は頭に血が上るのが分かった。

俺は落ちこぼれ。それに大して、目の前の獣が言うニード・クレイグは、最強にして、世界で一番最初の魔獣使いだ。

小さいころから見た目が似ている祖父と散々比べられてきた。その

せいで自分が落ちこぼれという印象はますます強まってきた。
その上、俺が初代の生まれ変わりだと？ 俺は俺だ！ 祖父と比べられてきたときと同じように、また勝手に期待されて勝手に失望されるのは嫌だ！

そんな思考が頭の中を埋め尽くしていく。

小さいころから比べられてきたせいで、一種の心的外傷トラウマのようなものが俺の中に出来上がってしまった。

俺は獣に食って掛かる。

「何でだじゃねえ！ 俺は俺なんだよ！ 大体なんでお前は俺と話せてんだ！？」

《…なんで怒ってたんだ？》

「ッ…！ …悪かった」

獣から聞こえてくる声は、心配げな色を含んでいた。

俺は自分が思っているよりも激昂していることに気づいて心を静める。

《……何でオレと話せてるか、だったな？》

俺が落ち着いたことに安心したのか、獣はうれしそうに俺に聞き返した。

俺は首を縦に動かして肯定の意を示す。

そして、

《オレが雷獅子で、お前はオレと契約してるからだ！》

獣…もとい雷獅子は俺にとんでもない事実を突きつけてきた。

六話（後書き）

誤字脱字、感想などお待ちしてます^^

七話

《オレが雷獅子で、お前はオレと契約してるからだ!》

雷獅子のその言葉で、俺は逆に冷静になってしまった。

俺がもう魔獣…特に雷獅子と契約している? バカバカしい…。

魔獣と契約するには、直接生気を流し込むという動作が必要だ。そして、俺はそんなことをした覚えはない。そもそも雷獅子は死んでいるはずだしな。

フツ…と鼻で笑って両手の手のひらを上に向け、胸の高さまで持ち上げてからゆらゆらと揺らす。「やれやれ」というジェスチャーだ。苦笑しながら、俺は雷獅子に問う。

「何か証拠はあるのか? あ、『オレが雷獅子』の部分と『お前はオレと契約している』の二つについての証拠だ」

明らかに小馬鹿にしている俺の態度が気に食わなかったのか、雷獅子は少しムツと——した雰囲気——すると、口をガパリと開いた。赤い口内に、白い牙がズラリと並んでいる。何を言い出すのかと思っていた俺だが、その予想は見事に外れた。

雷獅子の口の奥が一瞬光る、と脳が認識した次の瞬間。

バヂッ! と、俺の右横一メートルあたりを何かレーザーのようなものが凄まじい速さで通り抜けていった。

ゴロゴロ…! と雷のような音が少し遅れて聞こえてくる。

恐る恐る振り返って背後を確認してみると、俺が今立っている石のステージと水が貯められているプールの境目、その上空で激しくスパークする雷を水の盾が押しとどめているというシュールな光景が見ることができた。

ゴクリ…と俺はのどを鳴らす。

《雷閃つつー技だ。これで俺が雷獅子ってのはわかってもらえたか？》

「…ああ、それは納得した。…契約してるってのは？」

勝ち誇るように顔を俺に向けた雷獅子にしぶしぶ頷き返すと、俺は次の証拠の提示を促した。

すると、雷獅子はなぜか言いにくそうに首をかしげる。

「どうかしたのか？」

《いや、こういう時はニードだったら上手く説明できんだろーけど…》

「つまり証明できないと？」

《ち、ちげーよ！ ううー…！ あ！》

「『あ』？」

《お前、魔獣に絡まれねーだろ？》

「は？ 絡まれないうって…近付かれないってことか！？」

聞き捨てならない台詞が雷獅子の口から飛び出してきたことに、俺は眉をひそめる。

俺が落ちこぼれと言われる最たる理由は、魔獣に嫌われること。つまり、魔獣は俺に一定距離以上近付かないのだ。

俺の食いつきぶりに、雷獅子は少々驚きながらも続きを話し始める。

《俺が契約してんのはニードとお前の共通点『魂』とだ。『軀』は抜きにしてお前は半分だけオレと契約してる。曲がりなりにもこのオレ『最強の雷獣』アストラ・リクスの契約者なんだからそこの低位魔獣は逃げ出すはずだ。まあ、上位魔獣なら話は別かもしれないけど》

がंगाらがっしゃーん！ と俺の中で何かが盛大な音を立てて崩れていくのが分かった。

「…じゃあなにか？ お前のせいで…俺は魔獣に嫌われ続けたってことか！？」

「へ？ なんでそんなに怒ってんだよ？ 近付けないのは低位魔獣だけだぞ？」

「怒ってるわけじゃない…。むしろ、嬉しい…。かもしれない」

——低位魔獣？ 魔獣には格付けのようなものがあつたのか？ いやでも魔獣では強いって言われる母親のフレイムキャットは逃げ出した。てことはあれは低位魔獣だったってことか？ なら上位魔獣は？ 俺がまともに触れ合つたことがあるのなんて祖父のブラックドラゴンくらいだが…？

いろいろな疑問が頭の中を掠めていくが、一つだけ確信したことがある。

——俺は雷獅子と契約している！

そうとしか思えなかった。いや、そう思いたかった。

俺が悩み続けていた「落ちこぼれ」というレッテルの原因は、全て自分のせいだと思っていた。しかし、今は雷獅子と契約していたからという本当の理由を知れた。

いままで一人で抱え込んでいたものが、一気に解放された気分、俺は自然と笑みをこぼす。

それに、雷獅子は神獣だ。こいつと契約すれば落ちこぼれとは呼ばれなくなるだろう。

「分かった。納得したぜ雷獅子…」

《信じてくれたのか!?!》

雷獅子が急に立ち上がって俺のほうに歩いてこようとする。

しかし、雷獅子の四肢を封じている鎖はそれを許さなかった。ジャラジャラと音を立てて雷獅子の歩みを止める。

それをもどかしそうな視線で眺めた雷獅子は、俺に視線を移した。

《あのよ…、悪いんだけど『アストラ・リクス 軀』の方の契約も済ませちゃくれねーか? この雷を吸収する鎖と周りの純粋な水のせいで力がうまく使えねーんだ》

「ハッ! …わかった」

笑う。ゆっくりと歩みを進めて雷獅子の側に近付いた。

「改めて…、俺はロスト・クレイグ。ロストって呼んでくれ」

《『最強の雷獣』だ。アストラ・リクス リクでいい》

ピタ…と俺は雷獅子の皮膚に手を当てる。

意識を集中させ、生気を流し込んだ。

「よろしくな、リク」

《こっちこそ、ロスト》

俺の生気を雷獅子…リクが取り込むのと同じ、俺とリクをゲートの光が包み込むように覆った――。

七話（後書き）

今回は短めです汗

次はパートナーぎめなので少し長くなるかもなのでその反動です
<

一話

俺がリクに生気を流し込み、契約の儀を完遂させたことをゲートが察知。二人まとめてエニグマからエンティクスト学院に転送された。行きと同じ白の世界からゲートを潜り抜けて講堂『大空』へと帰還する。

「つと…！」

少しバランスを崩したが無事着地。リクが出てくるはずの後ろを振り返りながら教師やクラスメート連中の反応を想像してしまう。落ちこぼれと言われていた自分が神獣と契約できてしまったのだ。しかも《雷獅子》という本当は死んでいたはずの伝説の魔獣と。ジャックやルイスなどは驚くだろうし、教師陣も俺への評価を変えざるを得ないだろう。

だが、そんな不純なことを考えながら振り返った先。そこには『雷獣の牢獄』で見たあの雄々しさと神々しさを兼ね備えた巨体はなく。

代わりに俺の腰くらいの体高の、犬と猫を足した感じの動物がいた。

「……………」

毛の色は金、俺が契約した魔獣と同じ。そして一度は見たことがあるだろう、子供の獅子というのはまさに犬と猫を足したような顔の

造詣をしているのだ。

つまり、と俺は一つの可能性にたどり着く。

「……………もしかして…リクか…？」

俺に問いかけられたそいつは少し首を斜めに傾げると、さもそれが当然であるという風に口を開く。

《何当たり前のこと言ってるんだ？》

どうやら予想は的中したらしい。声は少し高くなっているが間違いなくこの可愛い動物くんはリクである。
だが、なぜだ？

契約後に姿が変わるなんてこと授業でも習わなかった。

しばし熟考したあと、リクに聞くのが一番早いと思いつく。

「お前…なんで縮んでんの？」

《縮んでる？ そーいやなんかロストはでかくなった気がするな！》

「ちげーよ！！ お前が縮んでんの！！！」

なぜかとぼけた返事を返すリクに全力で突っ込むと、リクは不思議そうに俺を見た後、講堂の鏡のように磨き上げられた壁を——正確にはそれに写った俺と自分——見て、納得したように頷く。

《あア、この姿になんのも久しぶりだな。…三百年ぶりぐらいか？》
「三百年？ どういうことだ？」

《よーするにな？ こっちの世界でオレが完全体だとロストの生気をすぐに吸い尽くしちゃって危ねーんだよ。無意識に吸ってる分だけでもすぐだな。干からびて死ぬ》

「干からびて!？」

物騒な言葉にびびる俺をよそに、リクは言葉が続ける。

《生気が枯渇すると命を削って新しい生気を生み出しちまう。だからでかいまだとロストの負担がデケーからこの幼生みてーに生気の消費が低いバージョンになるってことだ。ま、少ない命の量からどれだけ多くの生気を精製できるかが上位より上のランクの魔獣を使うコツだ、…ってニードが言ってた》

「受け売りかよ…」

…神獣と契約していくというのは思ったより大変らしい。リクが最後に言っていた命から生気を効率よく創り出すってのは場数踏んでいけばできるようになるのだろうか。できればそうであって欲しい。だが、リクが小さくなってしまったとしても懸念がもう一つある。

『魔獣外装』のことだ。

何しろ伝説の魔獣使いが使っていた武器なのだ。一振りで俺の全生気を消費とかなら燃費悪すぎとしか言いようがない。

「あのよ、リク」

《なんだ？》

「魔じゅ「おおおう！！ クレイグ！！ 無事に契約の儀を終えることができたのかあ！！！！」」

今、俺が一番気にしている疑問を解消しようとしているところに野太い声で邪魔をしてきたのは、筋肉の鎧を纏ったゴリラ型の魔獣…じゃなくてジルマス。

魔獣と見紛うばかりのその教師はがっしりと俺の肩をホールドして賞賛の言葉を浴びせてくる。

「見直したぞ！！ まさか実技があそこまでできなかったお前が、

今回二番目の早さで契約を完遂させるとは！！！！」

「二番目？」

《なんだこの暑苦しいのは》

「おう！ 二番目だ！！！！ 今年のパートナーは順番で決めることにしたからなあ！！ トップで終わらせたやつはすでに待ち合わせ場所を俺に渡して向かっていったぞ！！！！」

「待ち合わせ場所ってどこですか？」

《つーかうるさいなコイツ。消し炭にしてやろーか》

ジルマスの説明の間に、俺の足元で失礼なことを言いまくるリクだが、契約した魔獣使い以外にその言葉は聞こえない。

ジルマスはごそごそと腰のベルトポーチから紙を取り出すと俺に差し出してきた。

「——魔獣使いギルドエンティクスト支部——？」

紙片にはそう書かれているのみだった。どこかで見覚えのある字だったが脳内検索で見つからなかったので保留。

そしてこれはどういう意味なんだろうか。

「お前のパートナーがここに来いと言っていたぞ！！！！」

そういうことか。どのみちパートナー決めをしたらペアで魔獣使いギルドに登録しなければならぬのだ。そこでギルドに自分と魔獣の名前を登録してはじめて単位がもらうためのクエストを受けられる。

俺はジルマスに浅くお辞儀してから、リクと共に講堂を出た。

廊下を歩いて、学院の出入り口近くにあるギルド支部へと向かいながら、隣を歩くリクに話しかける。

「あのさ…、なんでリクは死ななかつたんだ？」

《どーゆー意味だ？》

「いや…、魔獣使いが死んだら魔獣も死ぬ。それなのになんで生きてるのか不思議だったんだ」

《…ニードのおかげかな。アイツが死ぬ直前にオレをエニグマに連れてってくれたんだ。んで、向こうで一度死んだ》

「死んだ？ でもお前がいなくなつてからもニードは生きてたつて家の伝承には残つてるけど…」

《オレは雷を司る神獣だぜ？ 心臓が止まつたくらいなら雷の力を注ぎ込んでしばらく動かし続けるくらいはできる》

「ふーん…。あ、お前のことなんて登録すればいいんだ？ 《雷獅子》はもう死んだことになつてんだからまずいだろ？」

《マズいかなんてオレが知るかー！》

ガブッ！ とリクは俺の脚に噛み付いてくる。

だが、あまり力を入れていたわけではないらしく、少し足を振ると簡単に振りほどけた。

「何すんだ！」

《考えるのは好きじゃねーんだよ！！》

リクに吼えられながら歩いていけると、エンテイクスト学院に設置されている魔獣使いギルド支部の入り口が見えてきた。

エンテイクスト学院の大部分を構成しているのは白い大理石で、その全てに魔獣によつて『硬化』の魔法がかけられている。

余談だが、魔法使いが使う魔法と魔獣が使う魔法に特に変わりはない。違つとすれば、魔法使いは多様な魔法を広く浅く習得し、魔獣は一種類の魔法を狭く深く習得するということが。

閑話休題。

大理石で作られている学園とは違い、ギルド支部は全て木造だ。しかし、樹齢千年を超える神木で増築したらしいので今後五百年は朽ちることがないそうだ。

そんな素材でできた木の扉を押し開けて、中に足を踏み入れる。

ギルドに入るのは一度授業で見学したとき以来だが、ここはまったく変わっていないかった。

広さは五十人が入る教室を六セット並べたくらい。

向かって右側の壁はクエストの依頼書がずらりと貼られ、左の壁側にはクエストに必要なポーションや地図、魔法生物ルキアの主な生息地の分布図などが売られていた。

奥には依頼書を提出、または完了報告をするためのカウンターとさまざまな手続き——単位を計算したりギルドへの登録——をするカウンターが並べて二つ置かれ、そこでは美人のギルド嬢がニコニコしながら依頼されるのを待っている。

そして、そんなギルド支部にいくつか置かれたテーブルに一人の女が座っていた。その横では何か白い物体が丸くなっている。あの女の魔獣だろうか。

俺に背を向けて座っているそいつが、おそらく俺のパートナー。というか今年はペア決めが適當すぎると思う。去年は成績を綿密に照らし合わせてやっていたはずだ。

内心で愚痴をこぼしながら、俺は自分のパートナーであろうそいつに近付いていこうとする。

しかし、

「……？　どうかしたのか？　リク」

リクはなぜか立ち止まり、スンスンと鼻で何かの匂いを嗅いでいるようだった。

木の匂いが珍しいのかもしれないが、まるで犬のようで少し面白い。

《…なんか…どっかで嗅いだことのある匂いが…》

「三百年エニグマにいたやつが何言ってるんだよ。いいから行くぞ？」
《…何だっけなあ…この匂い》

まだ何か言っているリクを連れて、俺はその女の側へと近付いていた。

俺の足跡が聞こえたのか、女が立ち上がって振り返る。

「——あ…！」

「…ッ！」

俺とその女の目が合った。

俺は驚いて声を上げ、女はアメジスト色の瞳を見開いて顔に驚きの色を浮かべる。

——そう。俺のパートナーであろうその女は、何の因果か神の気まぐれか、『氷姫』セレン・アルジェその人だった。

「「……………」」

俺とアルジェは二人して黙りこくったままだ。

まさかあのアルジェとペアが一緒になると思わなかった。図書館でコートを貸すという恥ずかしいあのエピソードだって今後はかわることが無いと思ってやったことだったのに。

しかし、このまま沈黙していても埒があかない。

何から切り出そうかと悩んでいると、ズボンのポケットに入れてお

いた紙片が乾いた音を立てた。

俺はこれ幸いとばかりにポケットから紙片を取り出すと、それをアルジェに突きつける。

「なあ、これ書いてジルマスに渡したの…お前か？ アルジェ」

俺が目の前に突き出した紙片をまじまじと観察し、アルジェはゆっくりと首を立てに振った。

「間違いない。これは私が書いたもの。これをどこで拾ったの？」

「拾ってねえよ！！ お前はトップで合格したんだろ？ 俺は二番目だったから自動的に俺とお前がペアになったんだ」

「…本当？」

「本当だ。嘘つく必要なんてないだろ…」

なかなか信じようとしないアルジェに、俺はため息をつく。

だが、これから一年間はコイツと組んで単位を稼いでいかないとはいけないのだ。ここで波風を立てても仕方ないだろう。

俺はアルジェの反対側まで歩いていくと、椅子をひいて腰掛けた。

「ま、これから一年間協力してやっていくんだからよろしくな？ アルジェ」

「…苗字で呼ばれるのは好きじゃないの。セレンでいい」

「…わかった。よろしく、セレン」

「…よろしく。…早速だけどギルドに登録しようと思うから、この記入用紙に自分の名前と魔獣の種類を書いて」

スツ…と、アルジェ…もといセレンが俺に羊皮紙と羽ペンとインクを差し出してくる。

それを受け取ると俺のまだ空白の記入欄の横、セレンの記入欄にサ

ッと目を通した。

「ッー!!」

「…どうかした?」

「いや…なんでもない」

俺はセレンの記入欄に書かれていた内容に少し驚くが、すぐに気を取り直して羽ペンを手取る。

(…契約魔獣… ホワイトドラゴンかよ…! てことはアイツの足元で丸くなってる毛玉みたいなのがホワイトドラゴンか…)

どうりで俺が近付いても逃げ出していないはずだ。

しかし、ドラゴン系と契約できる魔獣使いがまだいたのか…。と、神獣と契約している自分を柵においてセレンの実力にあきれ返る俺、羊皮紙に「名前:ロスト・クレイグ」と書いた後、「契約魔獣:」の欄で手を止める。

隠していても仕方ないと思うが、公にすれば好奇の視線にさらされるのは間違いないだろう。

「なあ、リク。お前のことなんて登録すりゃいい?」

《くんくん…。ア? 雷獅子じゃだめなのか?》

「…それでいいか」

まだ何かの匂いを嗅いでいるリクの許可を取って、俺は「契約魔獣:雷獅子」と書き込んだ。何度か羊皮紙を振ってインクを乾かした後、それをセレンに渡す。

「これでいいか?」

セレンは羊皮紙を見て一瞬だけ眉をひそめると、視線をテーブルの下で匂いを嗅いでいるリクに移す。

何回か羊皮紙とリクとで視線を移していたセレンだが、無言で席を立つとカウンターへ羊皮紙を持っていつてしまった。

そのセレンの後をホワイトドラゴンがぱたと翼を動かして追いつがる。

「ハッターだと思われたのか……？」

まあ、普通の人間ならば雷獅子が生きていると聞いても信じないだろう。

俺も自分の真横を『雷閃』？　とかいう技が通過するまで信じられなかったからな。

その時、リクが何かを思い出したかのように声を上げた。

《あアッ！！　思い出した！！》

「……なにを？」

《この匂いだよ！！》

「まったく何の匂いもしないんだが……」

《あの白竜と一緒にの女からしてる匂いだ！》

テーブルに肘をついて話半分に聞いていた俺だが、横で伏せていたはずのリクがテーブルに飛び乗ってきたので少し驚く。

「……なんの匂いだって？」

《あの女の匂い……どこかで嗅いだことがあると思ったらあの女と同じ匂いを三百年前に嗅いだ——！》

そこでリクは一度言葉を切って俺とセレンを交互に見やると、とん

でもないことを言った。

「——魔力の匂いだ！ あの子、魔法使いの匂いにする——！！」

二話

「セレンが魔法使い？」

リクのその言葉を、俺はオウムのように繰り返す。笑い飛ばしてしまおうと一瞬だけ考えたが、俺の頭の中で何かがパズルのピースのようにすっきりとハマっていくのがわかった。

セレンのあだ名である『氷姫』。だがそれはなぜつけられたのか。誰ともかわろうとせず、常に一人でいることからつけられた。ならばなぜいつも一人でいるのだ？

もちろん、一人が好き。という可能性もある。しかし、セレンが魔法使いであると考えてみると一つの仮説が浮かび上がるのだ。

——いつも、一人でいたかったのではなく、一人でいるしかなかった。

実技筆記の成績が常にトップのセレン・アルジェだって、ただの人だ。

誰かという時間が長ければ長いほどボロは出やすくなる。それが親しい友人などならばその可能性はさらにあがる。

しかも、セレンが隠しているだろう秘密は『魔法使い』ということんでもないものなのだ。

それがどうしたと思う人もいるかもしれないが、それはごく一部。魔獣使いと魔法使いの戦争『聖戦』以前の歴史では、魔獣使いになる前のものたちは魔法使いに奴隷のように使われてきた。

おかげで初期の魔獣使いたちの間で、「魔法使いは皆殺しにするべし」という雰囲気を作り上げられ、それは三百年の時を経た今でも大多数の人間の心に強く根付いている。

そんな中で自分が魔法使いなどと知られたら、即座にエンティクストにいる魔獣使い150人を筆頭に、ルミティア中の魔獣使いから命を狙われることになるだろう。

「なあリク。本当に、間違いなくセレンは魔法使いなんだな？」

《本当だ！ エニグマ以外で嗅ぐ魔力の匂いなんて魔法使いの魔力しかないだろ！》

「…同意を求めるように見つめてくるのはやめてくれ。信じてるから」

《本当か！？》

「ああ、信じてる。けど、その前にいくつか聞いてもいいか？」

《いいぞー！ なんだ？》

セレンが魔法使いだと事実にはほんの些細な矛盾があった。

その疑問をどうやって解決するかを考えると、リクに聞くのが一番早い。リクは俺の隣に座りながら小首をかしげた。

「魔法使いは三百年前に滅びたんじゃないのか？」

《いや、あん時に全員死んでたわけじゃない。ニードが何十人か逃がしてた》

「…逃がした？ ニード・クレイグが？ マジで？」

思わぬところで史実にも乗っていないことを聞き、頭の中に疑問符がいくつか浮かぶ。

自分の先祖がそんなことをしていたなんて全く知らなかった。歴史上ではあまり活躍する役ではないニード・クレイグにも、色々と事情があったのかもしれない。

しかし、新しい疑問符も浮かぶ中で、最初から抱えていた疑問の一つが解消された。

「ってことはニード・クレイグが助けた魔法使いの中の一人がセレンの先祖か…」

珍しい因果もあるものだ、と素直に感心してしまう。

当時逃がした側と逃がされた側の血筋が三百年の時を越えて今度は助け合う…もとい助け合わなきゃいけない——いや、一人だと卒業できないんだったクエスト受けられないから——関係になったわけだ。

「うーん…。まあお前は行儀が悪いから降りろ」

リクを抱きかかえて床に降ろ——やっぱりやめて、隣の椅子の上にちょこんと座らせる。

カウンターではまだセレンがギルド登録の手続きをしているのを確認してから、リクと額をつき合わせて内緒話モード。

「もう一つ質問。魔力の匂いがしたからって魔法使いとは限らないんじゃないか？ もし親が魔法使いであることを隠してれば、セレンは魔力を持っているだけで、魔法使いじゃないってことになる」
「それはねーと思うぞ？ ニードと魔法使いの隠れ里？ ってところに行ったときに気づいたんだが、まだ魔法の使えねえ子供と魔法の使える大人じゃ匂いが違ったぜ」

「じゃあセレンは『魔法の使える』匂いだったってことか？ わざわざお前が『あの女は魔法使い』って言い切ったくらいだし」

言いながら、俺はリクの頭の毛をクシャツと撫でる。
ふさふさとしたそれを撫でてやると、リクは気持ちよさそうに目を

細めた。

「ま、俺は無宗教だし、大昔に奴隷にされてたからって魔法使いを殺したいとは思わない。三百年も経てば十分だろ？ わざわざ殺し合いの歴史を続けることもない」

《……………》

笑い混じりにそう言うと、リクが無言で俺の顔を見つめてくる。

「…どうした？」

首をかしげると、リクはどこか懐かしそうに言った。

《…ニードに似てるなって思った》

「へえ…。どこら辺が？」

《大物っぽいところ》

「ははっ！ ありがと。…『落ちこぼれ』から…『大物』。……」
《どうしたんだ？》

リクの褒め言葉に笑っていた俺だが、自分の印象も変わるもんだな…と感慨深げに呟く。

しかし、呟いた後に黙り込む俺を不審に思ったのか、さっきの俺のようにリクが声をかけてきた。

「『大物』…ねえ。…ニード・クレイグなら、こんな時にどう行動するんだろうか…って思ったんだよ」

《？ 難しーことはよくわかんねえけど、ニードは『皆が笑えるようにする』って言ってたぜ？》

パートナーが魔法使いだってわかってしまったらどうするか。俺の

その疑問に、頼れる神獣はさらっと答えてくれた。

『皆が笑えるようにする』。そのフレーズが、頭の中でなんどもリフレインする。

「そついや、あいつが笑つてるところなんて見たことねーな……。…
皆が笑えるようにする』…か」

『氷姫』セレン・アルジェが笑笑えないわない理由。

それは、自分が魔法使いだつてことを誰にも教えずに、徹底的に秘密にしているから。ボロを出さないために人と関わらない。つまり、少しも笑わずキツイ態度をとり続けることで、自分から人を遠ざけているのだ。

しかし、人と関われないというのは案外、ストレスが溜まるものなのである。

俺だつて実技で「D」をとり続けて落ち込んだときに、ルイスに愚痴をこぼすことでストレスを発散していた。

両極端ではあるが、トップを取り続けるというのも相当なストレスの原因だろう。

だが、これからの単位を得るために受けるクエストというのはストレスを溜めたままでは危険なのだ。『おい？ ロスト？ どーしたんだ？』

魔獣への生気の譲渡にしろ、魔獣外装の扱いにしろ、どちらも集中力が高ければ高いほど成功しやすくなり、逆に集中力が保てない——風邪を引いていたり、怪我していたりする——と生気を渡すスピードが遅くなったり、魔獣外装ファンブルの失敗が起きやすくなったりする。学院の授業とは違い、クエストを受けて魔法生物『ルキア』を倒すというのは命がけなのだ。

一分一秒を争う状況で、ずっとストレスを溜めていたから手元狂っ

て死にました」なんてことになったら死んでも死に切れない。《返事くらいしろー!!》

だからセレンにはストレスを適度に発散させる手伝いをしてくれる『友』が必要なのだ。

俺にとつてのルイスのように。

だがその『友』には絶対に欠かせない条件が一つあるのだ！

と、とりあえずここまで長ったらしく説明を続けてきた訳だが、俺は——というより俺の心——はセレンの笑顔を見てみたいらしい。

その欠かせない条件とは、セレンが魔法使いであることを知っていて、なおかつセレンに心を許してもらうこと。

一つ目の条件に当てはまる奴は少ないだろう、っていうか多分俺だけ。ならば俺がセレンの『友』になる他ない。

…セレンに死なれちゃ困るってだけだからな？ 他意はない。

頭の片隅で言い訳をして、俺は頭を動かし始めた。

『友』になるためのハードルはいくつかあるが、それを巧く超えるためのアイディアは…っと。

「思いついた」

《さっきから何回も呼んでんだけど…?》

「え？ あ、わりいわりい！ ちょっと考えごととして」

少しお怒り気味のリクをなだめていると、足跡と羽音が近付いてくるのがわかった。セレンとホワイトドラゴンだろう。

首だけ後ろに向けて、俺はセレンの姿を確認すると、俺は椅子から立ち上がった。

「登録終わったのか？」

俺の問いに、セレンの首が小さく縦に動いた。

それを確かめてから、俺は先ほど思いついたアイディアの下ごしらえをする。

「なあ、セレン。ちょっと魔獣外装の確認とかしたいし、『大地』行かないか？」

『大地』というのは、何代か前の学院長が丸一年かけて創り上げた特別修練室のことである。毎年、契約の儀を終えた魔獣使いたちはそこで自分の魔獣外装の性能を試すのだ。

俺がどうしてもそこを選んだのかというと、さすがに学院長が魔獣の力を使って創った修練室なだけあって各部屋の中は完全防音。一度入ったら中から開けないと出てこれない。

中でどれだけ暴れても外にはまったく影響がない。

このせいでいくつかの部屋は入れなくなっているが、大事な話をするには最適なのだ。

「だめか？」

セレンはふるふると首を振った。金髪が光を受けてシルクのように煌く。

そして一言。

「わかった」

セレンに了承の返事を得た後、俺たちはギルド支部から特別修練室『大地』へと移動した。

ここでもセレンに話しかけてはみたものの、そっけなく返されるだけだったので話し相手をリクに変える。

「リク。俺は筆記のほうで十番以下に落ちたことがないんだけどさ、上のほうにあがったこともねーんだよ」

リクにだけ聞こえるような小声で話す。だが、リクからの反応はなし、つまんなさそうな話は無視することにしたのだろう。

「その理由はわかってんだ。いつも勉強してる途中で、テスト範囲以外の勉強しちゃうんだよ」

例えば、

「人……の心……についての勉強……とかね」
《人の心？》

「そうさ、だから今から、セレンと仲良くなってやる。作戦名『心の壁をぶっ壊せ』だ」

にやりと笑って、俺は少し早く歩き始めた。

受付の名簿に名前を書いてから部屋番号の鍵をかりると、俺とセレンは修煉室に入っていく。

中に入るのは初めてだったが、普通の更地を周囲が壁で覆っているだけだった。

セレンはホワイトドラゴンを呼び寄せると、

「それじゃ、魔獣外装を呼び出して「その前にちょっといいか？」…なに？」

セレンの言葉をさえぎって俺は言う。

作戦『心の壁をぶっ壊せ』の第一段階。
怪訝そうにするセレンに大きな爆弾を。

「お前、魔法使いだろ」

三話（前書き）

えと、三話と三話別バージョンの合体版です><

三話と三話別バージョンを読んでいない方は前書きはスルーしても
らって大丈夫です汗

三話

「お前、魔法使いだろ」

「ッ！！？」

俺がそう言つと、セレンは一瞬硬直して、弾けたようにサイドステップで移動する。

その移動した先には——ホワイトドラゴンが。

ホワイトドラゴンも向かってくる主の意図を察したのか、くると空中で背中を向ける。

セレンは素早くその背に右手を当て、当てた右手が淡く発光した。そして叫ぶ。己の魔獣から、力を借りるための言葉を。

「『アーマメント魔獣外装』——！」

「……話を聞けって」

「……………！！！」

まあ、予想していなかったことではない。予想していなかったわけではないが、普段は冷静沈着に見えるあの『氷姫』がいきなり襲い掛かってくるとは思わなかったのだ。

魔獣使いが同類に対して魔獣外装を呼び出すのは殺し合いの始まり。しかし、俺はそのセレンの行動に違和感を覚えた。

リクの言うように魔法使いであるならば、最初から魔法で攻撃してくればいいのではないだろうか。それをしない理由とは？

内心でそんなことを考えていたが、とりあえず応戦しないわけにはいかないだろう。

いきなり戦闘になったときに周囲に被害が出ないように『大地』を選びはしたが、よくよく考えてみると、ここで死んだ人は外に出られないので（一緒に入ったものに死体を運んでもらわない限り）殺されてもわからないということになる。

殺した側は、死んだ奴の魔獣外装が失敗して暴走した。と言っておけば無罪放免だ。もちろん殺す気も殺される気もないが、相手が魔獣外装を使っているのだから俺も使うべきだろう。

傍らのリクの背に手を当てて、己の中の生気の流れを把握。それを抽出して手の平からリクへと流し込む。

「リク！ 『魔獣外装』ッ！」
アーマメント

『魔法使いと殺し合いすんのは…三百年ぶりだなア！ 受け取れ口スト、オレの魔獣外装『タケミカツチ』だ！！』

リクが興奮したように吼える。

リクの体から光が粒子となって溢れ出し、それは俺の手で一本の刀に変わった。

柄は白、鍔は刃と同じ白銀で、六十センチ強の刃の上には金で紋様が彫られている。

完全な雷獅子だったリクにも感じた、凄惨なまでの神々しさを持った刀、——銘は『タケミカツチ』。

俺が魔獣外装を展開したのと同じように、セレンも魔獣外装を展開していた。

セレンの魔獣外装、形状は…槍。色は純白、長さは二メートルほど。これは授業で見たことがある。ホワイトドラゴン固有の魔獣外装『ブリューナク』だ。

確か、能力は——

「シッ！」

——質量を持った光を生み出すこと。

セレンはブリューナク的能力を応用して、光の矢を放つ。

俺は反射的に右に体を捻って回避した。

ステップを踏みながら小刻みに動いて照準を定められないようにする。

『心の壁をぶっ壊せ』 第二段階は、セレンに落ち着いてもらうこと。

俺は第一段階ですでにセレンが魔法使いであることをしっているとバラしている。それは、パートナーとしてこれからうまく連携をとっていく——仲良くする——ために一番の問題は、セレンが魔法使いであることを隠しているという事実だからだ。

だから最初に隠している事実を知っていると打ち明けることで、鉄壁のような心理的障壁を無理やり崩した。

あとは、俺に敵意がないことをわかってもらうだけ。

それを達成するために『なるべく怪我をさせないように勝って戦意を喪失させる』という条件が必要になってくるわけだ。

動きながら、俺は側で同じように動いているリクに声をかける。

「リク！ このタケミカツチってどんな技が使える？」

《どんな技？ 雷撃の塊みてーなのを飛ばしたり、刀身から雷撃つたりするくれーだ》

「威力は？ っと……！」

《…撃つ弾数によって違うぜ。さっきロストが俺に渡した生気を全部使えばあの女くらい消し飛ばせる》

「消し飛ばしちゃ駄目なんだよ……。威力の調節は？」

セレンから何発か光の矢が放たれるが、それをよけながら話を続ける。

《そー言われても…、刀ン中にある力を感じて、一発ずつ調節して撃つてきやいいんじゃねーの?》

「…リク、雷閃つてのは使えないのか?」

《あれ使ったらあの女が塵になる代わりにロストも死ぬぞ》

「…やっぱいいや」

死ぬのはごめんだし、殺すのもだめだ。

俺はセレンのほうにも意識を向けながら、タケミカツチの中に入っているはずの己の生気を確認する。

———これか！

とりあえず全て撃てば人を消し炭にするという話なので、その百分の一を刃に纏わせる。

チチチチッ！ と小さくスパークして、刀身の上を火花が走った。それを振りかぶると、

「フッ！」

氣勢を呼気として吐き出しながら、一息に腕を振った。

だが、セレンは光で盾を展開してそれを防ぐ。

魔獣外装を使うのは初めてなはずなのに上位魔獣の強化外装を使いこなすとはなんという応用力だろう。と、自分のことは棚に上げて感心していると、セレンが大きく槍を掲げ、回転させながら振り下ろした。そのブリューナクから放たれた光の矢は…三本。

今までとは比較にならない速度で飛ばしてくる。

「やべ…！」

サイドステップで回避しようとしたが、足が滑ってしまふ。
そして、その光の矢はそのまま俺の胸を――

《何やってんだ！》

――貫かなかった。リクがとっさに俺の脚を引っ張ってくれたおかげでギリギリ避けることに成功。

「さんきゅー！」

短く礼を言つて、慌てて体勢を立て直す。しかし、セレンは追い討ちをかけるように何本も光の矢を撃ってきた。

命からがら地面を転がってそれを避け、さっきの五倍の量の生気を使つて雷を放つ。

今度は雷の斬撃を飛ばすのではなく、自然の雷のような一条の雷槍を。ノーモーションで放たれたそれは、セレンの肩を掠めた。

「ッ…！」

セレンの端正な顔が痛みで歪む。

体が雷によつて意思とは関係なくビクッと震え、一瞬だけ身体の自由が利かなくなったはずだ。

その隙を見逃さずにダッシュでセレンに近付いていく。

「来ないで！」

セレンは叫ぶと、ブリューナクを振って光の矢を五本一度に撃つ。しかし、今度は俺もバランスを崩してはいない。なまじ質量を持つ

ただけに、矢の速度は光速どころか雷速にすら及ばないのだ。

残っている生気のひとつを消費して、俺にヒットする軌道上にあった右端の二本を健御雷神で叩き落とし、左足で地面を蹴って右に飛んでから、再びセレンの元へ――。

《！ ロスト！ 避けるッ！》

「は？ ガッ…ぐアッ！？」

――ボンッ！ となんの前触れもなく、俺の背後で爆炎が上がった。爆風と衝撃波で背中を焼かれ、俺は苦悶の声を漏らす。

「今…、何が…？」

つい口から戸惑いの言葉が出るが、言ってから俺は気づく。

（魔法…か！ 今まで使わずにブリューナクだけだったのは、そこから目をさらさせるためのフェイク…！？）

驚愕すると同時に、セレンの戦略の立て方に戦慄する。

セレンは間違いなく天才だ。相手が誰であれ、新米の魔獣使いであれば負けることはないだろう。相手が俺でなければ…だが。

俺は地面に倒れた姿勢から、雷を身体に纏わせ雷速でセレンの背後に移動する。

たかが光の矢を二本叩き落すただけに、生気のひとつを使うわけがない。繊細な操作も可能にする超高性能なタケミカツチでなければやろうとも思わなかったアイディアだが…、今回は魔獣外装の性能に助けられたな。

セレンの首筋にタケミカツチを押し当てて俺は言った。

「俺の勝ちだな…。落ち着いて話そうぜ？」

五分後

俺は向かい合う位置に座っているセレンに声をかけた。

「確認するけど、やっぱり魔法使いなんだよな？」

「…だ…どこで知ったの？」

冷静なセレンが言い間違えそうになるとは。

少し驚くが、俺はリクを抱きかかえてセレンの前に突き出す。

「セレンが魔法使いだったのは俺の魔獣《雷獅子》のリクに聞いた。何でもセレンから魔法使いの匂いがしたんだとき。でも、俺は別にセレンが魔法使いだからって殺そうとは思ってない」

「…魔力の匂い？」

「ああ、魔力の匂いだ。三百年前に嗅いだ匂いと一緒になんだと」

腕が疲れてきたのでリクを地面に下ろしてから、セレンに歩み寄る。

「ま、今更否定しても遅いけどな。さっきの爆炎…魔法だろ？」

「……………」

黙りこくるセレンに、俺はゆっくりと近付いていく。
刺激しないために、ゆっくり、ゆっくりと…。

俺は歩いていき、少し手を伸ばせばセレンに触れられるだろう位置
まで近付いてから言った。

「俺を信じてくれないか？」

「え…？」

「俺はお前のパートナーだ。お前が魔法使いであることをバラすな
んてことはしないし、それをネタに強請るようなこともしない。絶
対だ」

真っ直ぐにアメジストの瞳を見つめて、一言一言ゆっくりと話す。

セレンに考える時間を与えるためにわざと遅く話したのだが、それ
は成功だったようだ。

迷うように何度か視線を泳がせた後、セレンは俺の瞳を真っ直ぐに
見据える。

「…どうやってあなたを信じればいいの？　あなたが裏切っ「殺せ
ばいい」」

『大地』での最初の会話のように、俺はセレンの言葉をさえぎった。

「殺せばいい。俺はパートナーを裏切るようなまねは絶対にしない」
「……………」

よし、手ごたえありだ。

セレンは瞳を大きく見開いている。これは相手の話に興味を持った
という感情の表れ——らしい。

ここで一気に畳み掛ける！

「もう一度言っぜ？ 俺を信じてくれないか？ セレン」

俺にそう言われて、セレンの息遣いが少し早くなった。

ツ…と、俺の背中に冷や汗が流れる。ここで信じてもらえなければ、どちらかが大怪我するまでまた殺し合いすることになりそうだ。

「……………」

『大地』を静寂が覆う。

リクも空気を読んで静かにしているし、ホワイトドラゴンも地面に降りて心配そうにセレンを見ている。

そして、

「条件がある」

「…ああ、何でも言ってくれ！」

成功か！？ でも条件つてなに言われんだろう！？

内心ビクビクしながらも、笑顔でセレンに返答する俺。そんな俺にセレンは指を突きつけた。

「魔法をかけさせて。…あなたが裏切れないようにする魔法」

「おう。いいぜ」

「…本当に？ 裏切れば死ぬ魔法だけど」

「死ッ！？ ああ、いいぜ。俺は絶対に裏切らないから」

物騒な言葉に驚きはしたが、笑みを浮かべて肯定する。

するとセレンは拍子抜けしたように、

「…そんな便利な魔法はないわ」

と言った。

魔法使いとはいえ、何でも出来るというわけではなさそうだ。

俺がセレンの言葉に安堵している——もちろん裏切る気はないが——と、セレンが口を開いた。

「一つ聞いてもいい？」

「なに？」

「私に何をさせたいの？ わざわざ私が魔法使いだって言わなくても問題はなかったはず」

「『何をさせたいの？』って言われても……。強いて言えば、これから一年近く協力することになるパートナーなんだから、仲良く出来ればなーとか思ってたんだけど……」

「……なにが言いたいなの？」

俺が頭を捻りながら出した答えに、セレンは意味がわからないといった風な顔をしてくれやがった。

「あー、ほら、セレンって笑わないだろ？ ストレス溜まってそうだし」

「……さっきの続きをしたいの？」

「んなわけないだろ！ 話は最後まで聞いてくれ！」

さっきの続きとは魔法を使って殺しにくるということだろう。俺はそれを全力で否定してから、フォローの後の補足説明を始めた。ま、さっき頭の中でまとめた考えをそのまま話すだけだが。

「『笑わない理由』。なんでかなーとは思ってたけど、セレンが人を寄せ付けないのは魔法使いだってボ口を出さないためだろ？」

「間違っではない……けど」

「だから人と一緒にいない。口を滑らせる可能性が高くなるからな……」

そつだ。でも、俺は、俺だけはそれを知ってる。

「いつつもつまんなさそーにしてるお前に笑ってほしかったんだ。俺に出来ることならなんでもする」

だから、と俺は言葉を続けた。

「——俺のパートナーになつてくれないか？ 隠し事なんかしないで、いつも笑って一緒にいられるような……運命の相手に」

邪な気持ちなど何も無い、俺の心からの頼み。それを聞いたセレンはというと、

「……………」

なぜか下を向いてしまった。

「……どうしたんだ？」

俺が問うのと同じ時、ポト……と地面に透明な何かが煌きながら落ちていった。

セレンが顔を上げると、その頬には涙のあとがある。

「……うん！ お礼を言うのは二度目だけど……ありがとっ！」

そう言つて、セレンは笑顔を浮かべる。

俺が始めて見たセレンの笑顔は、どんな芸術品よりも美しかった。

さながら、氷姫の万年雪を溶かす、暖かな春の日差しのように――。

三話（後書き）

えっと投票ありがとうございました！

最終的には

「1」46票

「2」9票

という結果になったのですが、2に投票してくださった方たちの意見も反映させたいと思ひまして書いてみました！
そうしたらこういう形に落ち着いた訳ですが…

どうでしょう？

感想いただけると嬉しいです^^

あ、これのup後、三話と別バージョンは申し訳ありませんが消させて頂くことにします><
ほんとにすみません^^；

四話

男子寮・自室にて

今、俺はうつぶせになって背中に薬を塗られながら、とんでもないものを見ている。

…セレン・アルジェは見た目は本当に美人だし、声も可愛いという部類に入るだろう。

しかし、素のアルジェは…ヤバイ。

え？ 何でヤバイって？

それは――。

「さっきは本当にごめんなさいっ！ 魔法使いだっただけなら殺されるかもしれないって思ったら、先に殺すしかない！ って思っちゃって…」

「あ、ああ。そうなんだ」

《コイツ…こんなだったっけ？》

リクが心底不思議そうな声を出すのも無理はないと思う。

俺だって今日の前で展開されている光景が夢ではないかと疑っている。

なぜなら、俺の部屋では今メイド服を着たセレンが俺の世話を焼く、という異常事態が発生しているからだ。

「友達になってくれ」と言っただけを許してもらえたまでは良かった

が、セレンの魔法のおかげで背中に軽い火傷をした俺が「背中痛いから今日は帰らせて」といったところ――。

セレン「火傷それ…私のせいだよね…？」

俺「え？ いや、ほっときや治るよ。心配すんな」

セレン「ううん！ パートナーの私が看病しなくちゃ！」

セレンは学院で働いているメイドから無理やり服を奪った後に俺をベッドに叩き込んだってのが『大地』から帰ってきた後の事の顛末である。

氷姫バージョンを一年続けてきた反動なのか、心を許せる相手ができたのがうれしかったかはわからないが。口調変わってるし、心配そうに俺の背中の傷に薬塗るとか反則でしょ。

可愛すぎる。

素のセレンと氷姫のときのセレンのギャップが凄まじいのも可愛いと思う要因の一つだ。

「痛くない…？」

俺の背中に軟膏を刷り込みながら、セレンは心配そうに言う。

少し散らかっていた俺の部屋もソッコーで片付けてくれて、いまだ整理整頓されたきれいな部屋になっている。

そして、俺は部屋のベッドの上でセレンに薬を塗ってもらっているのだが。

「大丈夫だって、痛くない」

「…ほんと？」

痛みよりも別の意味で限界が近くなってきた。だってセレンみたいな超絶美少女と二人っきりで、しかも自室で、

あの細い白魚のような指が背中の上を這い回っているのだ。

「私…、あなたのこと知ってたんだよ？」

自分の中の煩惱と凄まじいバトルを繰り広げていると、唐突にセレンが口を開いた。

「どういうことだ？」聞き返そうかとも思ったが俺が反応するより早く、セレンが続きを話し始める。

「だって…実技であんなに失敗する人なんて始めて見たもん」
「…そっちな」

目に見えて落ち込む俺に、セレンは焦ったように言葉を付け足した。

「あ、あと、コート貸してくれてありがとう。背中の方に『クレイグ』って縫ってなかったらわからなかったかもだけど」

「え？ あれ名前書いてあったのか…？ つーかよくそんなの見つけたな…」

「ふえ…！？ ち、違うよ別にコートを調べたりなんかしてないからねっ！？」

「別に疑ったわけじゃ…」

「え？ …もう…！ …ばか」

「ブツ！ げぼげぼげぼ！」

咳き込んだ。

駄目だ。可愛すぎんだろこいつ…。

俺とセレンがそんなコントをしているうちに、リクはセレンのホワイトドラゴン、シルヴィアと意気投合したらしく、二人（二匹？）で仲良く遊んでいた。

「…薬、塗り終わったよ？」
「おう、さんきゅ」

薬を塗り終わったと言われ、俺が上着を着た直後。
シルヴィアが一声「きゅいっ！」と鳴いた。

「！！」

それを聞いたセレンはとっさに近くのクローゼットのドアを開けると、俺の黒のロングコートを引っ張り出してそれを羽織る。
いきなり何を始めたのかと俺が怪訝に思うのと同じ時、

「ロストー！」「ロスト君！」

「「おめでとー！！！」」

ばーん！ とノックもなしにドアを乱暴に開け放って入ってきたのは、ジャックとルイスだった。

俺はうんざりしながらその二人に言葉を投げかける。

「何しにきたんだ？ お前ら」

「うわ！ その言い草はねーだろ？ せっかく魔獣と契約できたって聞いたから祝いに来てやったのに」

「あのね？ 僕とジャック君がペアになったんだよ？」

「へー。魔獣は？」

「お前を怖がるだろうから部屋に置いてきたぜ！ ってあれ？ なんでアルジェさんがロストの部屋に？」

今頃気付いたらしい。俺の部屋にいたセレンを見て、目を丸くするジャック。

ルイスは空気を読んだのか、ぴくつと眉を動かしたただけだ。

「…何か問題あるの？」

「い、いえ！」

うわあ、切り替え早いなセレンさん。すっかり氷姫モードだよ。

氷姫の絶対零度の視線に射すくめられ、ジャックは本気でビビっている。まあ、でもセレンの着てるコートの下はメイド服なんだけどな。

ジャックが知ったら卒倒するだろ。

すっかりセレンに威圧されたジャックが少しかわいそうになってきたので説明してやる。

「セ…じゃなくて、アルジェが俺のパートナーなんだよ」

「何！？」「あはは」「……………」

俺の告白にジャックは目を丸くし、ルイスはなぜか笑顔だ。セレンは不機嫌そうにも見える無表情で黙っている。

ジャックは口をパクパクと開閉させていたが、やがて何か思い出したかのように声を発した。

「う」

「う？」

「うーらやーましーい！」

絶叫したあと、猛スピードで俺の部屋から飛び出していった。そののあとを追うように、

「ごめんねロスト君！ お祝いはまた今度みんなでやろーねー！」

と、ルイスもジャックを追いかけていつてしまった。

ふう…とため息をついてからセレンをみると、どこか不機嫌そうである。

何怒らせてんだあのアホ！ と心のなかでジャックに悪口を言いながら、不機嫌そうなセレンに話しかけた。

「悪いな…。アホだけど、悪気があつてやつてるわけじゃないんだ」

あまりジャックをフォローする気もなかったので、悪口を交えながら言い訳する。

しかし、

「違うの…」

「違う？」

意外にも、セレンは首を横に振った。

少し俯きながらも、必殺の上目遣いで見つめてくる。

「セレンって呼んでほしい…」

「はい？」

「だから……名前でも呼んで？」

あ、わかった。そういえば苗字で呼ばれるのは嫌いって言ってたっけ。

それにしてもすごいデレっぷりだな…。多分これが素のセレンなんだろうけど。

内心で納得したり苦笑したりしていたが、それよりもセレンの態度の変わりように相変わらず驚く。

ノーマルモードが俺専用で氷姫モードがその他（ジャックとかルイス）用か。

嬉しい気もしないではないが…、うーむ。

これは、嬉しい悲鳴というやつか。

「わかった。セレン。でも、今日はもう寝るから良いか？ 明日はクエスト受けに行きたいから…十時にギルドの中でな」

「うん！ わかった！」

名前で呼ばれた途端に笑顔になるセレン。
そして、部屋から出て行くこうとして、

「あ、回復魔法使っておくね？」

背中 of 火傷は跡形もなく治る。

セレンはシルヴィアと一緒に部屋を出て行った。

……使えるなら最初っから使えよ……。

心の底からそう思う俺であった。

四話（後書き）

このセレンについて感想いただけると嬉しいです…^^;

デレすぎな気もするので…

五話

「ふわあ——」

「眠そうだね？ ロスト君」

セレンといい友達パートナーになれた翌日。

食堂で大あくびをしている最中に話しかけられ、俺は首を後ろに向ける。

「おう、ルイス。ちょっとな……」

まあ眠れなかった理由は読んでなかった本を読んでいたからなんだけど。

…決してセレンのせいとかじゃないぞ？ ちょっと夢でセレンが笑いながら殺しに来る夢を見ただけだ。

「ふうん……。あ、僕の魔獣を紹介するね？ ゼロウルフのロキだよ」「ゼロウルフ？」

聞いたことのない魔獣の名前だった。
どんな魔獣なんだろう。そう思って、ルイスが手招きする延長線上に視線を向ける。

「おお、かっこいいな」

鋭い目つきに細身ながらも筋肉のついた身体。体格の大きさも完全体のリクの半分くらいだ。見た目は——狼。

ぶっちゃけ、温和そうなルイスとは正反対の見た目だった。

俺のそばで肉を食っていたリクは一瞬だけゼロウルフ——ロキを見

据えた後、そのままガツガツと肉を食い続けている。

ロキは俺のすぐそばにいるルイスの横に近づいたというのに逃げだす様子はない。ってことは上位魔獣か。

「本当に？ 嬉しいなあ。契約するのは簡単だったんだけど、探すのが大変だったんだよね」

「？ わざわざ探しに行ったのか？」

「うん。どうしてもロキと契約したかったから」

「へー。珍しいな」

などと飯を食いながら話を続けていたが、

「お、もうこんな時間じゃん」

時計を見ると九時四十分を指していた。セレンとはギルド支部で十時に待ち合わせの予定なので、そろそろ行かないとまずいだろう。

「ルイス、俺そろそろ行くわ。お前もジャックと一緒にじゃ苦労が耐えないだろうけど、がんばれよ！ んじゃな。…いくぞリク」

「うん、がんばってねー！」

まだ巨大な肉をがつついていているリクの背中を叩くと、俺はルイスに別れを告げた。

リクは俺の頭ほどある肉の塊を未練がましくくわえて俺に付いてくる。

「あとでまた食わせてやるから置いてけよ…」

その食い意地の悪さに半ば呆れて声をかける。
しかしリクは首を振って、

《うるせー！　これはオレが食う！　…ちょっと生氣よこせ！》
「生氣？」

肉をくわえているために口ではモゴモゴと言っているが、意味は通じるところが魔獣使いと魔獣の便利なところだな。
リクの背中に手を当てて生氣を少しだけ流し込む。

「何やんの？」

《焼肉》

「は？」

渡した生氣で何をするのか気になったので聞いてみたところ、一言で答えが返ってきた。

思いもよらないその答えについ立ち止まってしまふ。
すると、バチバチヂッ！！！！　とリクの口からスパーク音が聞こえる。

リクの肉から白煙が立ち上り、どんどん色が変わっていく。
三十秒ほどですっかり香ばしい匂いを放つ焼肉が誕生した。

「お前…まさか雷で肉を焼いたのか？」

《そうだぞ？》

「なんて無駄な能力の使い方なんだ…」

仮にも神獣の能力を肉を焼くために使うなよ…。
と言いたくなったが、苦笑いしながら先を促す。

「ほら、さっさと行くぞ？」

《ちょっとー！》

俺はギルド支部のドアを脚開けて中に入った。

結局、リクは瞬く間に肉を平らげて今は満足げに顔を緩ませている。

「あ、セレン」

時間は九時五十分。

まだ少し早いかと思ったが、セレンはすでに依頼書の貼り付けてある壁の前でクエストを物色していた。

昨日のバトルでも思ったが、セレンの実力は相当に高い。魔法を抜きにしても今のエンティクストで右に出るものは少ないだろう。俺も魔獣外装の性能で勝ったようなものだし。

なので、それなりの単位が取れるクエストでも問題はないと思う。

俺が近付くと、シルヴィアが鳴く。

「おはよう」

セレンが振り向いたので挨拶をした。

俺を見て、一瞬だけ笑顔を浮かべそうになったセレンだが、すぐに氷姫の無表情に戻る。

「おはよう、…ロ…クレイグ君」

「んー。なんか良さそうなクエストあった？」

クエストを見ていた風だったので聞いてみると、案の定セレンは三つの依頼書を指差した。

「あれ？」

セレンが頷いたのでそれを見える。

—— 小型ルキア 『リトルレオ』 十五体討伐—— 取得単位3——
—— 中型ルキア 『ミドルノア』 二体討伐—— 取得単位6——
—— 大型ルキア 『レックス』 一体討伐—— 取得単位12——

依頼書には倒すルキアの名称と、それを達成することで得られる単位しか書かれていない。

詳しい説明はカウンターに持つていくことで受付のギルド嬢が教えてくれる。

確か卒業までに必要な単位は300だ。小型ルキアを討伐して貰える単位は大体3。そして、クエストは一回受ければ一日休まなければいけないので、小型ルキアを討伐するクエストばかり受けていても二百日で卒業できる。

だが、俺とセレンならばもっと早く卒業して、一人前の魔獣使いになれるだろう。

ならば、まずは中型ルキアの討伐を選んでみるか。と俺は考える。これで苦戦するようならばもう少し慣れるまで小型ルキアを討伐していくのもいいし。と、いうことで。

「ミドルノア倒すやつにしないか？」

大型ルキアであるレックスは防御力が異様に高い。

まだ魔獣と契約したばかりの魔獣使いでは倒すのに苦労するだろう。とは言っても小型ルキアのリトルレオは十五体倒しても単位が3しかもらえない。

ならば間を取ってミドルノアを選んだわけだが、セレンも同じ考えだったようで、すぐに同意してくれた。

俺は壁からミドルノア討伐の依頼書をはがし、それをカウンターまで持っていく。

セレンとともにカウンターの前に備え付けられている椅子に腰を下ろして、俺はギルド嬢に依頼書を手渡し、

「すみません。説明お願いします」

「はい！　かしこまりました！」

黄色い詰襟の制服を着たギルド嬢は、元気の良い返事を返してくれた。

依頼書を一瞥すると、カウンターの後ろの棚から一枚の紙を取り出して、カウンターの上に置く。

それを指差しながら解説を始めるギルド嬢。

「ミドルノア二体の討伐ですね？　これはルミティア近辺からの依頼ではなくロメドス公国からのものですのでご了承ください！　移動手段としまして大陸間移動ゲートを使用いたしますので、ロメドス公国の魔獣使いギルドから、ミドルノアの巣へ向かっていただきます！」

ギルド支部が何よりもまず研究したことは、大陸間の移動を容易に

する移動方法の開発である。

エニグマのように別世界に行くゲートは聖都ルミティアと、ルミティアに並ぶ大国であるカミド国にしかないが、大陸間を移動する転送ゲートは各国のギルド支部に設置されている。

「ミドルノアの巢は、ロメドス公国首都の正門を出てから二時間ほど東に歩いたところにあります！　そして、討伐証明としてミドルノアの虹色尾羽を二本持って帰ってきていただきます！　それでよろしければ、ギルドカードを提示してください！」

「ギルドカード？」

「私が持つてる」

二人一組で活動するため、ギルドカードは一枚しか配られない。

セレンは「グリフォン・セレンアルジェ・ロストクレイグ」と刻まれた白色のそれをギルド嬢に差し出した。

ギルド嬢はカードを受け取ると、カウンターに置いてあった水晶球に押し当てる。水晶球は一瞬だけ発光して、すぐに透明に戻る。

ギルド嬢は笑顔を浮かべながら、セレンにカードを返してお辞儀した。

「それでは、初めてのクエスト。成功されますようお祈りしております！」

「どもつす」

「……………（ぺーり）」

俺はそれに礼を言ってから、セレンは無言で会釈してから、リクとシルヴィアについてくるように声をかけ、ギルド支部のカウンターの奥につながる扉へと向かった。

その途中、

「あ、ロスト君とアルジェさん。今からクエスト？」

ルイスが声をかけてきた。

だが、一緒にいるのはロキだけで、ジャックの姿が見当たらない。クエストを受けに来たわけではなさそうだ。

「どうしたんだ？」

聞くと、ルイスは困ったように笑った。

「ジャック君がどのクエスト受けるのか迷いすぎて結局決まっていんだ…。良かったらどんなの受けるか教えてくれない？」

「やっぱりジャックはアホだな…。俺らはミドルノアを倒しにロメドスに行くところだよ」

「ミドルノア！？ 今日受けに行くって事はクエストは初めてでしょ？ 中型を相手にするのに魔獣外装の確認とか終わったの？」

……普通は驚くよな、いきなり中型のルキアを倒すって言われたら。俺は頭をかいてルイスの肩に手を置いた。

「昨日試したんだよ。んじゃ、そろそろ行かないとセレンが怒りそうだから」

「あ、ごめんね？ 引き止めちゃって…。アルジェさんもすいません」

「…べつにいい」

リクとシルヴィアを回収して俺とセレンはゲートのある部屋に入っていく。

一人残されたルイスはポツリと呟いた。

「『セレンが怒りそうだから』…か。名前で呼んでるんだ…」

五話（後書き）

一応言っておきますが、BL要素は入っていません^^;

感想、誤字脱字、表現のおかしいところなど、教えてくださるとうれしいです！

六話

光の筒のような形状をした大陸間移動ゲートから、俺とセレンとリクとシルヴィアはロメドス公国に降り立った。

ロメドス王国は魔法世界レグアニアの南方にある国で、温暖な気候とナババという黄色く細長い果物が特徴の国だ。

ゲートの側の長机に座っているギルド嬢——ロメドス支部の制服は青だった——に話しかける。

「すみません、ルミティアから来ました。ロスト・クレイグとセレン・アルジエです」

俺はそう言ってから、ギルドカードを持つセレンに振り返る。

セレンも頷いて、ギルド嬢にカードを渡した。

ギルド嬢はそれを受け取って、手元の水晶球に当てる。この動作はゲートを使う前の規則らしい。ルミティアのほうでもゲートのある部屋で行われた流れだ。

「ロメドスにようこそ。連絡は水晶球ラクリマを通じて受けています。ギルドカードに入国許可を出しておきますので出入国の際、守衛にご提示ください」

「わかりました」

返されたギルドカードをセレンに渡して、俺たちはギルド支部のゲートの部屋から、依頼書やクエストに必要なものが売っている部屋

に移動する。

俺は売店を一瞥してからセレンに聞いてみた。

「なんか必要なものとかあるか？ あつたら買っておくけど」

「え…？ 必要なもの…？」

一応周囲には何人か人影が見えるので氷姫モードなのだろう。

俺は首をかしげたセレンに、売店を見ながら答えた。

「うん。回復用の魔法が込められた回復結晶^{ヒールクリスタル}とか」

回復用の魔法といっても、昨日俺の火傷を治してくれたようなセレンの魔法ではなく、回復の魔獣外装を使つて造られた水晶のことだ。少し値は張るが、持っていれば心強いものである。

「…持っていたほうが良いかもしれないけど…」

「じゃあ買うー」

《飯も買つてくれー！》

「わかったわかった」

横からリクが口を挟んできたので軽くあしらってから売店へ向かうとする。だが、セレンはどこか心配げな雰囲気だ。

それに疑問を感じた俺は、

「…？ どしたの？」

素直にセレンに質問することにした。

すると、氷姫モードでは珍しい少し慌てたような感じでセレンは言う。

「あの… お金とか…」

「金は大丈夫なのかってこと？」

セレンは頷く。

俺はあまり気にしてなかった問題なので、セレンが心配してくれたことにどこか違和感を感じてしまった。

エンテイクストではあまり関係ないことなので皆忘れているのかもしれないが、俺の実家であるクレイグ家は名家だ。

落ちこぼれと言われていても仕送りくらいはもらっている。

「大丈夫だよ。財布持ってきたし」

中身はすべて世界全土で使用可能なルミティア金貨だ。

エンテイクストでは金を使わなくても生活できるので、ほぼ手をつけずに残している財布の中には、おおよそ100枚以上は入っているだろう。

ちなみにルミティア金貨四枚で、平民の四人家族が一年暮らしている額だ。

皮の財布から金貨を取り出してセレンに見せると、セレンは目を丸くして金貨を見た。

「ほんとにどうかしたの？」

「……お金持ちなんだ…」

少し悔しそうにしているセレンを見ると、俺はその表情の理由を気付いてしまった。

——貧乏なのだ。

学費の高いエンテイクストだが、実技か筆記でトップを取った生徒には奨学金が出ている。しかし、それは二つあわせても学費のほとんどの飛んでいき、贅沢しなければ金が少しだけ余るというレベル

だ。

しかも魔法使いであることを隠すために生活しているなら、家にもあまりお金はないだろう。

「……家柄は良いから……。セレンもなんか必要なものがあつたら言ってくれ。おごるから」

「……………むう」

セレンはむくれてしまった。

「本当に金は余ってるからいいんだけどなー。と思いながら、俺は売店のおばちゃんに話しかけた（こういうところにはなぜか必ずおばちゃんがいる）。

「おばちゃん！ ヒールクリスタル 回復結晶と……。セレン、他に必要なものとかある？」

「……………地図」

「ここらへんの地図もください！ あ、ヒールクリスタル 回復結晶は四つね！」

「あいよ！ ええと、回復結晶はひとつ銀貨二十枚で地図は銅貨十枚だから……銀貨八十枚と銅貨十枚ね！」

貨幣のレートは銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚だ。

俺は財布から金貨を一枚取り出して、おばちゃんに渡す。

「はい。おつりはいらないよ」

「……………」

「ひっ！？ ち、違うぞセレン！ 金持ちアピールとかじゃないから！」

背後から凄まじい視線を感じて、言い訳をしてしまう俺。

いや、勘違いしないでほしい。本当に金持ちアピールじゃないから。

「わかったよー気前のいい兄ちゃん！ 名前はなんてんだい？ 知りたいことがあったら何でも聞いてくれ！」

こついう売店では情報を扱うことも多いのだ。

それをジャックに聞いたことがあったから実行したのだが、どうやら本当のことだったらしい。

「名前はロスト。今は特にないけど、知りたいことがあったら聞くことにするよ」

「そうかい！ それじゃあ気をつけて！」

「ん。わかった」

おばちゃんに手を振ってからセレンの方を恐る恐る見てみると、少しは落ち着いたようだった。

それに安堵しながら、俺はセレンに回復結晶ヒールクリスタルを二つ渡そうとする。

「……………嫌味？」

「そんなんじゃないよ！」

表面上は落ち着いたように見えたセレンだが、まだ怒っていたらしい。

氷姫の視線がブリザードのようになってきたので、腰を低くしながら回復結晶ヒールクリスタルを献上した。

「受け取ってくれないか？ だってほらセレンも持つといってくれたら俺が結晶使えないような怪我したときに助けてもらえるでしょ？」

必死の言い訳が功を奏したのか、セレンはそれを受け取ってくれた。

ふう…とため息を付く俺に、リクが不満そうに話しかけてくる。

《なー！ オレの飯は？》

「さっき食べただろ？ …クエストが終わったら買ってやるよ」

しかし、よく考えてみたらミドルノアの巢は歩いて二時間のところにあるらしいので、昼飯は必要だろう。

もう一度売店のおばちゃんに声をかける。

「おばちゃん。昼飯用の携帯食料とかない？」

「あるよ！」

おばちゃんは売店の棚から銀色の袋をいくつか取り出して俺の前においた。

「いくら？」

財布を取り出して聞いたが、おばちゃんは笑顔で首を横に振った。

「さっき沢山買ってくれたからね。これはサービスだよ！」

「ありがとうございます」

なんか得した気分になるが、携帯食料八つとさっきの釣りではぜんぜん釣り合わない。

文句を言う気もないが。

俺は携帯食料を受け取ると、半分をセレンに渡した。今度は素直に受け取ってもらえたので、俺は安心しながら残りの四本を制服のポケットに納める。

《オレは今食いたい！》

「…そうすると昼飯抜きだぞ？」

《…なんか仕留める！》

「そんなもんに使う生氣はない。我慢しろ」

《うがー！》

やかましくリクが吼えるが、それをスルーしてセレンの顔を見る。

「んじゃ、行くか」

「…わかった」

いまだにお怒り気味の氷姫だった。

魔獣使いギルドロメドス支部を出て、俺とセレンはロメドスの町を歩いていた。

地面は舗装されてはいないが平らな道で、大通りには様々な出店が活気よく宣伝をしている。

リクは食べ物に移りしているようだが、俺はロメドスに来たらいつも食べているものを探して歩く。

一応は出口を目指して歩いているのだが、その途中で目的のものを売っている店を見つけ、セレンに断ってから店の主人に声をかけた。

「セレン、ちょっとあれ買ってくる！ すいません！ ナババを二つください！」

そう、俺が食べたかったのはロメドスの特産品であるナババだ。店主に銅貨四枚といわれて財布を開けるが、金貨しかなかったので仕方なくそれを差し出す。しかし、

「金貨！？ すまんなあんちゃん、お釣りがないよ…」

「ええ！？」

「……………これで」

俺がうるたえた声を出すと、セレンが後ろから手の上に銅貨を乗せて差し出してくれた。

「それなら大丈夫だよ！ あんちゃんは綺麗な上に気が利く彼女さんがいるんだねえ！」

「ブツ！」

「……………（ぼっ）」

俺は店主の言葉を聞いて吹き出したが、セレンは無言で頬を赤らめただけだった。

…なぜだ？

もやもやした疑問を心中に抱きながらも、ナババを食べ終えた俺とセレンは、ロメドス公国の外へとつながる門へと辿り着いた。

門は開いていたが、すぐそこに守衛がいたので声をかけてみる。

「すみません、クエストで少し外に出たいのですが」

「ん。いーよー。いきなー」

なんともやる気のなさそうな守衛は、セレンの持つギルドカードをチラリと一瞥し、すぐに許可を出してくれた。

俺は門の外に出てから首を傾げる。

「
∴ あれつて守衛の意味あんなのかな？」

六話（後書き）

誤字脱字の報告お願いします^^

あと感想を書いてもらえたら更新スピードが速くなったりします<

七話

「ふう…、そろそろ半分かな？」

俺はすっかり遠くなったロメドス公国を振り返りながら呟いた。

ここに来るまでルキアに出会うことはなかったが、それは国の近くであつたことが大きいだろう。

この先は文字通り魔物の巣窟というわけだ。

俺はシルヴィアと遊んでいるリクに声をかける。

「リク！ ちょっと頼みがあるんだけど」

《なんだ？》

「これから先はルキアが出てくるはずだから近くにルキアの匂いがしたら教えてほしいんだ」

《なんでオレが…ってうわ！ やめろシルヴィア！》

未だにじゃれあっている二匹にため息をついて、俺はセレンを見る。セレンは頷いて、キツとシルヴィアを睨む。

「シルヴィア！ やめなさい！」

セレンから厳しい叱責が飛んだ。

シルヴィアはビックリとその声に反応し、申し訳なさそうにセレンの肩に飛び乗った。

「さんきゅ、セレン」

「うっん、役に立てたなら良かったっ」

今は周りに人がいないので氷姫モードはお休みだ。

素のセレンがにっこりと微笑む。

俺はセレンに笑い返してからリクに視線を向けた。

「で？ やってくれるか？」

《嫌だめんどくせー》

「やってくれたら最高級肉食い放題だ」

《任せろ！》

元氣よく返事をしてもらえた。

しかし、それに喜んだのも束の間、リクがとんでもないことを言い出した。

《あのよー…。ルキアってなんだ？》

「…は？」

《だからよー、ルキアって何なんだ？》

「…セレン？」

なんだと言われてもルキアはルキアとしか答えられない俺は、ルキアを生み出した魔法使いの末裔であるセレンにリクからの質問を丸投げにする。

「…えつと…ごめんなさい。わからないです…」

しょんぼりと落ち込んでしまうセレン。

しかし、三百年前に生きていたのなら魔道王が召喚したルキアのことくらいは知っているはずなのだが…、

「ほら、三百年前に魔法使いの親玉が召喚した魔獣みたいな奴のことだよ」

俺がそういうと、リクは心当たりがあつたようだった。記憶を探るような表情が、閃いた時のようなそれに変わる。

《ああ！ それ先に言ってくれよー！ それならわかるぜ、なんたつて元仲間の匂いだからな！》

ピタッ…と俺とセレンの足が止まる。

今、こいつ何て言った！？

俺とセレンは大体そんな感じのことを考えていただろう。

しばしリクの言葉を反芻して聞き間違ではないことを確かめると、俺はリクの頭部を鷲掴みにして持ちあげた。

リクの胴体が左右に揺れる。

「元仲間…？ ルキアって…元は魔獣だったのか！？」

《イタイ、頭イタイ》

少し興奮して力を入れすぎてしまったようだ。

少しだけ力を抜くと、リクはため息をついて説明を始めた。

《お前らの言ってるルキアってのはエニグマから魔法使いの王に無理やり召喚された奴の子孫のことだよ…。やめて！ 揺らさないで！》

「そろそろ腕疲れてきたからやめるけどさ…。まさかそんな事実があつたなんてな…」

地面の上にリクを投下して、俺はしみじみと呟く。

ニード・クレイグが魔法使いを逃がしたという事実、ルキアが魔獣の子孫という秘話、リクと一緒にいると歴史の裏舞台について良く知れるな…。もっと知りたくなってくる。

俺は密かにリクを今度尋問してやろうと心に決めたが、今はミドル

ノアの討伐に集中しようと気を引き締めた。

それから一時間。

幸いにも、最高級肉食べ放題という目的のためにリクが頑張ってくれたおかげで、ルキアに出会いそうになっても回避しながら進んで来られた。

二時間ぶっ続けで歩いたために少し足が疲れたが、それ以外はどこも消耗することなく、ここミドルノアの巣へ到着する。

視界に二羽の巨大な鳥を収めながら、俺とセレンは岩陰に隠れていた。

すでに生気を渡して魔獣外装を呼び出している。

「よし。じゃ、合図してから三秒後に岩陰から左右にダッシュで飛び出して攻撃を仕掛ける。まずはセレンが派手な光の矢で気を引いてくれ、その隙に俺が一匹を丸焼きにするから」

「うん、わかった。…怪我…しないでね？」

セレンの気遣いに笑みがこぼれそうになるが、それを抑えてリクとシルヴィアにも注意する。

「お前らはここに隠れてろ。完全体になれない以上、戦闘には参加させられない。シルヴィアも飛んでてもいいがリクと同じで待機してろ」

《…しゃーねーなー。あ、でも少し生気もらえるか？ 何かあった時に困るからな》

「きゅいっ！」

リクとシルヴィアが頷く。

意外と聞きわけの良いリクに驚いたが、魔獣外装に使う量の十分の一程度の生気を渡しておいた。

セレンもシルヴィアに生気を渡し終わったのを見て、俺はセレンに目配せする。

「3、2、1…今だ！」

ダッ！ と地面を蹴って俺は左へ、セレンは右へ駆け抜けていく。

それに気付いたのか、ミドルノアの一頭が警戒の声を上げた。

俺が走ってミドルノアの背後へ回り込もうとする直後、二頭の頭上に光の矢が雨あられと降りそそぐ。

ドドドドドドドッ！！ と、矢は一本残らずミドルノアの両翼に突き立った。

それを見て、思わず苦笑いしてしまう。

「…絶対特訓してたな」

俺も負けてはいられない。

特訓していたのはセレンだけではないのだ。昨日セレンが帰った後に俺もリクにコツを聞いて、自分の生気の量を増やすための特訓を試していたのだ。

そのおかげか、今のタケミカツチに込められている生気の量は昨日と比べて約——五倍。

その九割以上を一発の雷撃破に込める。

『アストラ・リクス
最強の雷獣』直伝——！

「『ジャッジメント
雷王の裁き』——！！——」

朝、『大地』で試し撃ちをしたときにはリクに本来の千分の一の威力も出ていないと酷評された技ではあるが、中型ルキア相手なら釣りがくるレベルだ。

俺の腕に振りに合わせて雷撃破が飛翔。二羽の足元に着弾する。

バッヂイイイイ！！！！ と激しいスパーク音が響き、小規模な雷の旋風がミドルノアを覆った。

その雷は十秒ほどで止まり、中からは香ばしそうなローストチキンが…、討伐証明どうしよう。

「よかった…」

思わず駆け寄って確認してしまう。

日ごろの行いが良かったおかげか、なんとかミドルノアの討伐証明である虹色尾羽は原形を留めてくれていた。

セレンも俺に心配そうな視線を向けてきていたので、親指をクイツと上に向けて無事だとアピール。すると安心したように表情を緩ませて、俺に近づいてくる。

「まずはクエスト成功…だな！」

「うんっ！」

「つかすごいなセレン！ もう魔獣外装使いこなせてる！」

「そ、そんなに褒められると………照れちゃうよ」

恥ずかしげなセレンだが、やはり最初のクエストが大成功だと嬉しいらしい。

頬を桃のように赤らめたセレンとハイタッチしながら、焼け焦げた
トチキン

ミドルノアから虹色尾羽を採集する。

ナイフを持ってこなかったのは失敗だったと思ったが、意外と簡単に抜けた。

しかし尻もちをついてしまう。

「フフッ」

「笑うなよ……」

.....

「あはははははははははは！」

二人で大爆笑してしまった。

そんな俺たちを見てか、リクとシルヴィアもローストチキンに近づいてくる。

だが、どこか様子がおかしい。

クエストに成功したのを一緒に喜ぶ……というふうな様子ではなく、あれではまるで――、

《敵だ！ 良くわかんねーけど、オレと同じレベルの奴の匂いがする！！》

リクが吠えるのと同時、俺たちのいるすぐ近くに『何か』が砲弾のように飛び込んできた。

もうもうと粉塵が立ち上り、視界が曇る。

「シルヴィア！」

セレンの声がした直後、シルヴィアの鳴き声とともに風が巻き起こり、砂塵を吹き飛ばした。

つーか、リクと同じレベルって…完全体の雷獅子と同じ強さってこ

とか！？

リクの言葉の意味を頭が理解し、内心で驚愕すると同時に、砂塵中から姿を現した『何か』を見て、俺は目を見開いた。

人型、だが人では決してありえない身長15メートルほどの巨大な体躯。

鉄よりも硬い漆黒の肌。超身体能力を実現させる隆々とした筋肉。そして半裸のような体を包む黒金の鎧。

それはゆっくりと俺たちのほうに振り向いた。

「おいおい…ウソだろ？」

コイツって…と呟いた俺の後をセレンが引き継ぐ。

「大型ルキアの中でもさらに最上級……『暴王』キングオーガ…！」

ルキアでありながら『王』の名を冠した二つ名を持つ存在。天災レベルといわれるルキアである『六王』の一。

『暴王』キングオーガが、俺たちの前に君臨した。

七話（後書き）

更新頑張りました^^

あ、あとルキアとか魔獣とか魔獣外装の名前全く思い浮かばないんですがどうすればいいでしょう？

感想、誤字脱字のご指摘、お待ちしております^^

追記ですが、

すみません「Kazu」さん！

あせってせっかく書いてくれた感想を削除してしまいました汗
本当に済みませんでした…。

八話

「ガアアアアアアアア！！！」

『暴王』が吠える。

それは物理的な効果など何も持たないはずのただの雄たけびだ。しかし、僅かに恐怖という感情が、俺の心の奥底に芽生えるには十分。

逃げ出したくなった。だが、先ほどの砲弾のような速度で追われれば逃げられる可能性など髪の毛の先ほどもない。

俺は頭をフル回転させ、この状況を脱するためにどうすればいいかを考える。

そして、

「セレン…、三十秒だけ気を引いてくれ。あとは俺が何とかする」

「…何とかします」

「リク…！ ちょっと良いか」

《…なんだ？》

リクも気を張り巡らせて、キングオーガの方を警戒している。

キングオーガは幸いにもまだ動き出す様子はないが、直接戦えば勝算は低いだろう。

最初に奇襲で四肢の一本でも奪っておかなければ、俺はそう思い、キングオーガを見ながらリクに作戦を伝える。

「リク、お前には完全体になってもらう。生気を作るから待ってて

くれ」

《久しぶりだなー。… コツは煙だぞ》

「ああ、わかつてる…！」

俺が目を閉じてイメージしたのは、体を流れる生气ではなく体の形をした『命』だ。生气のもととなるそれを使って、意図的に生气を作り出す。

深呼吸して、俺は命の左腕一本分を体から切り離した。

現実の体の腕にも凄まじい脱力感が感じられる。

俺は切り離れたそれをだんだん細かくしていくイメージをした。

最初は二つ、次は四つ、八つ、十六、三十二、六十四、ひたすら細かく切り刻み、最終的には数が把握できないところまで分けていく。よく祭りで出ている綿菓子のような要領で、少しの命から沢山の生气を作り出すための動作。

この局面において、俺の集中力は最大にまで高められていた。

しかし、キングオーガはそれを待っていてはくれなかった。手に持つ巨大な棍棒を振り上げる。

「セレン！ 頼む！」

問題はここから、大きくした生气をうまく体を流れる生气に取り込んでいく作業。

その時間は三十秒あれば足りる。

しかし、『王』相手に稼ぐ三十秒がどれほど長いか、もどかしい気持ちが俺の心を覆うが、今はセレンを信じるしかない。

セレンはブリューナクで巨大な光の盾を作る。

ブリューナクの残りの生气をすべて込めたのだろう。生气を失った魔獣外装は砕け、光の粒子となって形をなくす。その直後に光の盾も砕かれる。

それで五秒。

やつと——五秒だ。

今すぐセレンの加勢に入りたいとはやる気持ちを抑え、俺は作り出した生気を少しづつ体に馴染ませていく。

作り出した生気量は魔獣外装に込めた量の二十倍。単純計算で一番最初の百倍の量だ。

それを無理やり体の中にねじ込んでいく。

一度取り込んでしまえば、生気の器がその大きさまでになるが、小さい器を広げるには時間がかかるのだ。昨日やっておけば良かったと後悔するが、これほどの生気を生み出せたのはこの極限状態によるものが大きいだろう。

偶然による生気的大幅なステップアップ。それを幸運というかどうかはわからないが、目の前のキングオーガをどうにかしなければ純然たる不幸であることは間違いない。

「シルヴィア！ 来て！」

「きゅいっ！」

セレンの声に合わせて、シルヴィアがセレンのもとへと飛翔する。まさにどんぴしゃのタイミングで、セレンの伸ばした右手に、シルヴィアの背が触れた。

「『アーマメント魔獣外装』！」

セレンの手から生気がシルヴィアに流れ込み、シルヴィアの体からあふれた光がブリューナクを形作る。

それを、——三回。

三本のブリューナクがセレンの手に出現した。

それを見て、俺は生気を取り込みながらも内心で感嘆の声をあげる。

（すごいな……！ 一度に三つの魔獣外装……理論的には不可能じゃないがやるうと思ってもできることじゃない）

セレンはそのうちの二本をキングオーガに向かって投擲する。

丁度、キングオーガの頭頂部近くにそれがあがった瞬間、

ドパツ……！ と閃光と爆音が空に満ちた。

ブリューナクが二本砕け散るが、先ほどのように生気を使いきって砕けたわけではない。

生気を残しながら光に還る——魔獣外装の失敗だ。ファンブル

以前ルイスが実技で失敗した時はレッドハウンドの子犬という簡単な魔獣の魔獣外装だったために、大きな怪我をせずに済んだのだが、ブリューナクは上位魔獣ホワイトドラゴンの魔獣外装である。ファンブル

それが失敗すれば魔獣使いに命の危険をもたらすが、セレンはそれを逆手に取ったようだった。

真白き爆炎が、キングオーガの頭を焼き、先ほどのように砂煙がもうもつと立ち上る。

そして、セレンはキングオーガと俺たちを分けるように光の盾を広範囲に展開し、何かを唱えて二度腕をふるった。

一度目で光の盾の上部から漏れる砂煙ががほのかな光を発し、二度目で紅き爆炎が光の盾の向こう側を埋め尽くした。

それを見て、俺は一つの可能性に思い当たる。

ダスト・エクスプロージョン
粉塵爆発。

魔法で砂煙を小麦粉にでも変え、俺の背を焼いた時のような炎で着火したのだろつ。

もしかしたらキングオーガを倒せたかもしれない。そう思った瞬間、無情にも光の盾は砕かれた。

しかし、誰かに見られれば自分が魔法使いかもしれないとばれるかもしれないリスクを負ったその攻撃のお陰で、生氣を取り込む三十秒はすでに経過していた。
俺はリクに視線を向ける。

「リク！」

《おう！》

リクの体が一瞬、稲妻のごとき光を発し、巨大な本来の姿へと変わった。

キングオーガよりも小さいものの、その体から発せられるプレッシャーは『暴王』すら超えている。神々しさと雄々しさを併せ持つ巨躯。金色のタテガミが陽光を受けて煌めく。

伝説の中で詠われる『アストラ・リクス最強の雷獣』——雷獅子が『暴王』の前に歩を進めた。

《よおロスト、良く頑張ったじゃねーか》

「そりゃどうも…、で？ 最初の百倍の生氣で、どんだけ動ける？」

《全力で動いて…あと一分でとこだな》

「…やれるか？」

少しの不安とかなりの期待を織り交ぜた俺の質問に、

《任せろ！！》

頼もしい咆哮で答えてくれる相棒。

「つかさつきから体中がだるくて動けない。

物凄いスピードで生気が抜けていくのだ。リクが最初に言っていた「干からびて死ぬ」が実感できた。

だが、そんな俺を背に、リクはググツと後ろ足をたわませる。

限界まで力を溜めて――――、

ドンツツツッ！！！！ 凄まじい筋力を以って大地を蹴りつけ、まさしく神速の動きでキングオーガへと飛びかかった。

八話（後書き）

ロストがあんまり役に立っていない気もする八話ですw w w

感想など書いてもらえると励みになります^^

あ、あと一応受験生なので——あと二十日で最初の受験w w - - -
たまに更新が止まることもあるかもしれません。
気長に待っていてくださいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9452y/>

最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

2011年12月27日23時27分発行